

始



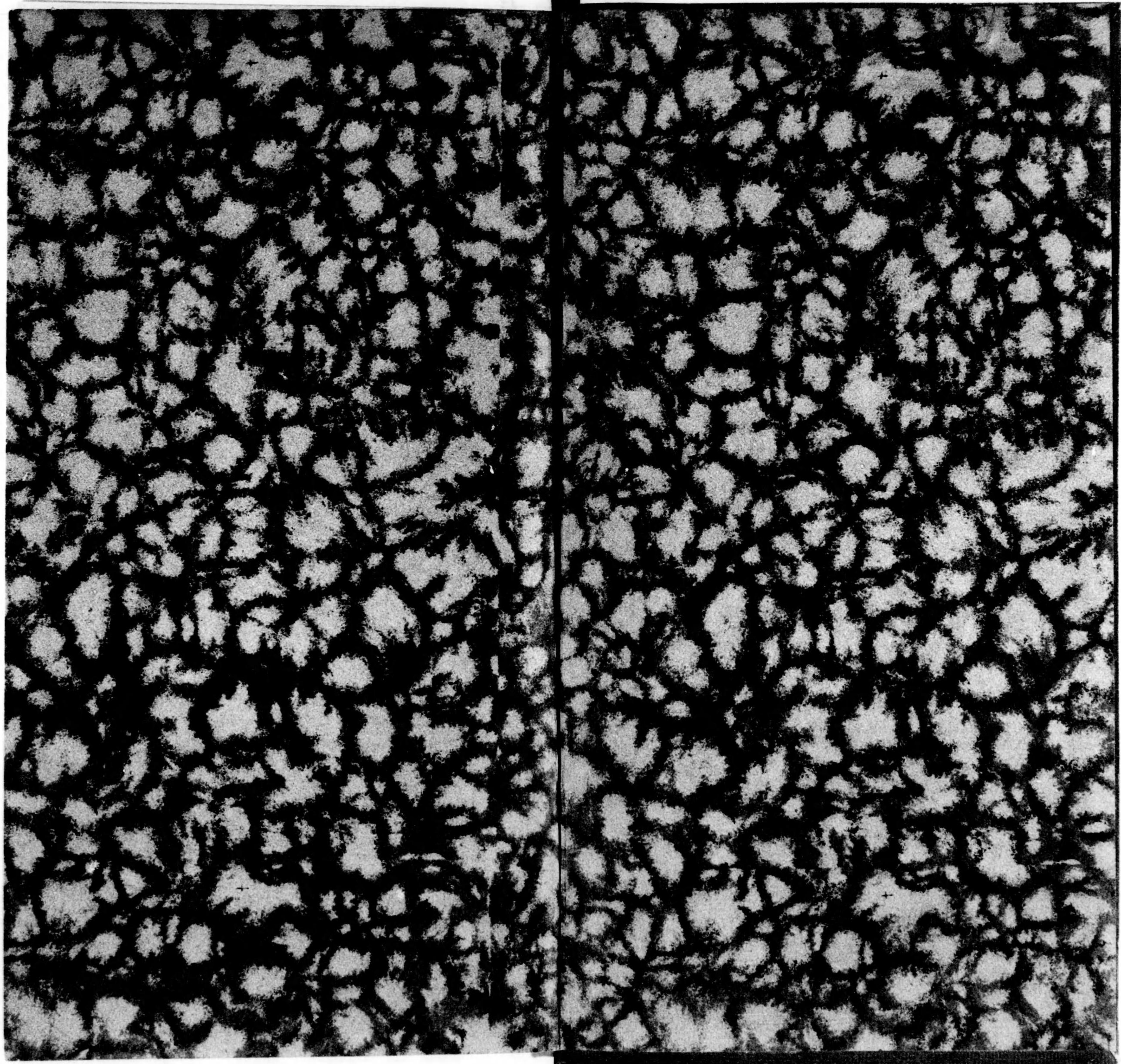
X
複写





X





特103
868



三 角 の 眼

~~~~~  
百 瀬 し づ 著

弘 道 閣



題字 伯爵 小笠原長幹  
口繪 江木榮子  
序文 上司 小劍  
同 櫻井鈴子

序文 松內冷洋  
同 松本雲舟  
同 岡田八千代  
自序 著者

△

之  
眼

光正八年七月廿四日

表幹



欣之  
茶

『三角の眼』といふと、圓い世間を、三角に睨んだやうなものゝ見方で、書き記されたといふことを思はせるが、この本に集つたものは、**平靜無事な言はゞお座なりの記録**である。然し將來専ら創作に向はんとする光明ある著者の素質は、**このお座なりの中にも、少しは窺はれる。**

殊に卷末の創作一篇を別に離して見ると、著者の近頃力を入れて書いたものだといふだけに、其の閃きが讀む者の眼を射るところがある。さうして其處に溢れたものは、まだそんなに多くは世慣れない著者の純真な心である。將來、このよき素質を育て充たす時、著者はこの國の女流作家の行列の先頭に立つてゐるであらう。

一九一九年七月七日



百瀬倭文子様

初めて御目にかゝりましたのは、昨年の夏で御座ひましたね。宅へ御出で下さるといふ御電話を頂戴した折り、恰度出仕度をして居りましたので、何處か東京で御目にかゝる場所を選ぶことに御約束して、銀座の臺灣喫茶店の二階へ御誘ひ致しました。

あれから、もう一年経ちました。又銀座の夏が来て、あの窓前の柳が長い緑の條を涼しい風に靡かす頃になりました。其後、あなたが重ねて、大崎の宅の方へ御訪ね下さいましたし、餘所ながらあなたの御消息を伺ふ機會も御座いまして、あなたが何時も御健康で、多忙な新聞記者生活を愉快に生活してゐらつしやる御容子を蔭ながら御喜び申して居りました。今度、從來御書きなさいました隨筆を一冊に御纏めになることを伺ひましては他事ひてならず嬉しく存じて居

ります。

それにしても、元々、作家としてお立ちになる御希望を有つて御いでのおあなた（これは初めてあなたに御逢ひ申した時の印象からきた私の獨り決めですが）に取つては、繁雜な新聞の御仕事は、随分内生活と掛け離れたものでは無いかなども考へられます。藝術とジャーナリズムとは、何處まで行きましても、結局、融合點の發見されないもののやうに思はれます。それは往々記事からも深い衝動を感じさせられることは御座いますけれど、何うも藝術から受ける衝動とは性質が違ふやふに思はれます。本來の御希望を隠して、忙しい仕事をしてゐらつしやるあなたは、さういふ小點に心の争闘が御有り<sup>に</sup>違ひないとも御推察いたしました。然し又、一方から考へますと、どんなことでも經驗として享<sup>け</sup>容<sup>れ</sup>ることが出来れば、その上の幸ひは無いやうにも思はれます。その豊富な實感<sup>は</sup>、將來あなたの藝術を完成させる礎石となる

ばかりでなく、現在の日々をも緊張した生活とするに違ひ御座いません。あなたの樂<sup>た</sup>しさうな御容子を拜見しますと、長い未來のために暫らく隱忍して礎石を置き、土臺を据えてゐらつしやる心強さを感じました。

・何れにもせよ、此の御本はあなたの從來の生活の此上ないスヅハニヤとなるで御座いませう。そうして此の御本に盛られたさまぐの事實に關するあなたの深い御實感が、優れた作品として現はれる日の近き將來にあることを信じて御待ちして居りませう。私は此の二つの意味を申し上げて、あなたの最初の御本の貧しい賤に致したいと存じます。

大正八年七月六日雨の朝

男の水を扱ふ音をきゝつゝ

大崎谷山 櫻井鈴子

倭文子さん。

貴女あなたがこの間、社へお訪ね下さつたのは、丁度あの惨虐な鈴辨殺し事件の發表された朝でした。應接間でお話しながらも、私の心はわく／＼してゐました。——この稀代の惨劇を何ういふ風に紙上に表現したものが、訪問の方針、個所を如何に定めやうか、單なる殺人事件としてよりも更らに深き因由、大きな社會問題として何を擱まねばならぬのか——そんな考が私の胸に渦巻いて、貴女との會話も、實は上の空になり勝ちでした。何うかお許し下さい。私はあの事件に對して、全くそれ程緊張してゐたのです。併し、私は「三角の眼」といふ貴女の御本の表題を聞きのがすまでに、鈴辨殺しの虜とはなつて居らなかつたのです。寧ろその一語は鮮か過ぎる程、私の頭に、強い印象の刻まれたことを申上げなければなりません。

慌だしい焦燥を包んだ私の眼は、あの時、貴女と對座して、貴女を不快ならしむる迄に、屹

度三角に光つたのであろうと存じます。貴女の眼が柔かに落つけば落つくほど、私の眼は鋭三角形に、いら／＼と光つたに相違ありません。

倭文子さん。

淑女に對して、甚だ禮を欠いた申條ですが、懺悔はあらゆる罪惡を償ふに足るといひます。

私の告白が如何に非禮でも、貴女は笑つて寛容を與へて下さることゝ存じます。

全く、あの時卓を挟んで對談する貴女の白い顔が、私の眼には何時の間にか——吳々も、吳々も、お許し下さい——獐猛な、強烈な、慘殺者山田憲の顔に見えたり、忽ちにしてまた宛然シヤイロツクを思はせる執着の鬼、老鈴辨の姿になつたりして、私の心を其事件に囚へ去らうとするのでした。そして彼等の眼も矢張り不安な三角形をなして、氣味悪い眼光を放つのでした。

痛ましく、慌だしく、慘たらしき三角の眼、私と山田憲と、鈴木辨藏と、そのみでは決してありません。痛苦と懊惱の現代生活は、そこに生くる總べての人の眼を、三角に光らせずには置かないのではありますまいか。

「三角の眼」……それは現代を象徴する如何にも適切な題語である。貴女が「三角の眼」の鉢の中にどんな内容を盛らうとなさるのか、假令へば現代世相を捉へて、これを嘲殺しやうとなさるのか呪はうとなさるのか、それとも純客觀的な冷かな批判者たらんとなさるのか、でなければ、その温い胸に現代人の痛苦を抱きしめて、血みどろの惨ましい傷手を醫して下さらうといふのか、私の敢てそれを知らんとするところではありません。

たゞ希くば、うら若き貴女の、その末頼もしけなる芽生の花を、充分に培ふて、やがて、明るき陽光の下に、眼覺ましくも鮮かなる實と花とを結ばれんことを、私は親しき、倭文子さん

のために一言、以つて序となすものであります。

東京日日新聞社編輯局にて 冷洋生

四

静子さん、「三角の眼」が世に出ることを御歡びいたします。あなたとは昨年暮以來、殆んど毎日數時間に亘りて斜めに向ひ合つて仕事をしてるますから、親しいといへば可成親しい間柄ですね。でも、私はあなたの内容に一度も立ち入つたことがなく、あなた自身も私に心の閃めきさへ見せられたことがないから、親しくないといへば随分親しくない間柄でせう、實をいへば、あなたが三角の眼の所有者であることさへ、ほんやりの私は今まで氣が付きませんでした。あなたの眼が三角の形をしてるといふやうな事を發見した人がありとすれば、それは余程あなたに親しい人かも知れませぬ。

あなたには十年ばかり前、太田水穂兄の許でおさけ姿のあなたに御目にかゝつた事があるさ

うですが、私はつひ忘れてゐました。あなたと私とは一つの平行線のやうなものでせう。併し  
さういふ平行線の關係にある私の見た所は割合に公平であるかも知れません。

静子さん、あなたは生來純直な婦人です。あなたが置かれた環境はあなたの精神的發達を妨  
げた所があるやうですが、あなたの持つて生れた靈の光が、時々清き光を放つことは、いかに  
鈍眼の私でも認めざるを得ない所であります。『三角の眼』はあなたの靈の光の現はれと申して  
宜しいでせう。

あなたが亡くなられた母上を慕ふの情は時々あなたから伺ひました。『三角の眼』にも其の美  
しい情が可成に出てゐるやうです。之れを讀んで同情同感の想ひに泣かされる讀者も多くある  
こととせう。あなたの胸の奥に秘められた其の清い憧憬の情はやがてあなたの美しい人格の反  
映であります。

『三角の眼』が廣く多くの讀者に歓迎せられ愛讀されることを切望いたします。

讀賣新聞編輯の卓上にて

大正八年七月

松 本 雲 舟

倭文子さんは幽雅な趣味を持った人だ、着物に帯に、きらびやかな、淺薄な流行を追はぬ床しい柄を撰む人だ。それ丈にその生活の方法にも常に趣味に生きやうとしてゐる人かもしれぬ。

——これが私の倭文子さんに始めて逢つた時の第一印象でした。その時の五明倭文子さんは果して今の百瀬倭文子さんであるかどうかは分かりません。けれ共、倭文子さんは逢ひさへすれば相變らずニコ／＼として人の好き／＼な笑ひをたゞへてゐられます。しかし其陰にはなかく利かぬ氣の個性が漂つてゐるやうにも思はれます。倭文子さんは優しく見えながらも何かをきつとやり遂げて見せやうといふ意志はあるらしく見えます。其倭文子さんの菓が出るといふのは何となく楽しみな氣がします。夫がもし豫期に反したものであれば今後が一層待られます。又

もし私が思ふやうなものであれば夫は倭文子さんとして當然な事でせう。本文を見ずに序を書くといふ事は可笑しい事かもしれませんが、兎に角何處か強情な赤ん坊のやうな氣のする倭文子さんの本が出るといふ事が嬉しいあまりにかくは。

岡田 八千代

## 序

銀座街頭に、爽やかな陽光を浴び、軟い微風をうけて、素直に靡いてゐる柳の、青々とした枝ぶりを、編輯局の玻璃窓から、自分の机の上に倚りかゝりながら、ぢつと眺めてゐると、

『百瀬さん。三階の社長室でお招びです。』

といふ可愛らしい給仕の小さな聲が、背後で爲ました。私は、そつと振りかへつて、その給仕の蒼白い顔を視、そして、黙つて點頭きました。給仕は、もう自分の役目を果したといふやうに、いち早く、他の仲間同志の群に、すがたを消しました。私は、暫時考へてゐました。

『何の用だらう？ 三階の社長室といつても、現在は社長も留守であるから、社長さんの御用でないのは元より解つてゐるが、然し、其室には、よく、KさんやBさんが居られる。Aさ



んも時には、其所で調査ものなど爲てられるのを見うけるから、この方達の内、何方か私に用があるのでは、あるまいか？そうして、この私に、一體、何んな御用があるのだらう？」

私は、聊か不思議な念に襲はれながら、それでも、兎に角、三階の其室に昇つて行きました。何とやら、憶氣づいたような私のすがたが、其室の入口の、硝子の扉に映つたところ、Aさんはにこ／＼とした面もちで、私を招じ入れ、左様して、いきなり私に、慥んなことをお訊きになりました。

『あなたは、現代婦人の觀たる現代青年といふものを書く氣がありますか？ ありませんか？』

『現代……青年ですつて？』

と、私は不意を喰はされながら、ちよつとどきまぎして、慥う訊き返しました。

『ええ。現代青年でも、現代社會でも宜しいんですね？』と、Aさんは、其室に、も一人居た男に訊きました。

『ハイ、まア、現代社會の方が結構です。いええ、そんな難かしい意味のものでなくて、ただあなたが御覽になつた社會の事物丈をお書き下されば結構なのです。今迄新聞にお書きになつたもの丈でも、一向構ひませんから……』

その男は、慥う云つて、Aさんの方と、私とを等分に視ながら、一枚の名刺を出して、今、此處へ私を迎へた理由を談して下さいました。

私がこの『三角の眼』を——『三角の眼』と題したのは、元より私の眼が隅々まで届いてゐないといふ意味と、それから私の眼が三角だとの皆さんの評判から、ちよつと思ひついて附けた題名です——。兎も角も書いてみましたのは、まア、そんな譯からなので、左様して、それが今日からほんの五六日前のことでありましたので、何分にも落ち付いて考へるといふ、時間もなく、又毎日の公務の他に、この頃尠しく、始めかけた仕事もあり、且つは、現在非常に、私

は健康も害してゐますので、思ふことの萬分の一も、筆には現はれなくなつて了ひました。折角、世の中へ出たいと希つてゐた、あはれなる名なし草の幼き芽も、やうくその時節が到来したころには、折悪しく自分の身の衰弱を感じてゐたり、外は災天續きに、濕ひの露をうけるべき餘裕を與へられなかつたりして、先づ美はしく咲き出さねばならぬ花の一輪から、既に色も香もなき狂咲きの醜さに、我と吾身、吾が力を、恥ぢねばならぬような感じのみが爲れるのであります。けれども、如何やら慙うして世の中へ、あはれな新芽を吹かせて下さいました方々に、ふかく感謝し、又このあはれな花の狂咲き、この醜ひ出来榮えにも、どうか正しい御批判の眼を向けられて、此後の爲にも宜しく御教示、又御憐みも賜はりたく面厚ながら、此誌にお願ひ申上げる次第でございます。

大正八年六月四日

讀賣新聞編輯局にて

著

者

### 三角の眼 目次

亡 母 へ……………一

女の視た現代青年……………二

新聞記者といふもの……………七

高襟と蠻殻の好例(武者小路子の御兄弟)……………二六

各國劇場から觀た婦人……………三三

名流婦人の生ひ立ち談……………三七

文學博士の印象……………四三

難かしい夫と妻の撰び方……………五三

趣味 講話(秋の感じ二つ)……………六九

樂屋見たまゝ……………七  
 夏すがた……………八  
 職業婦人……………七  
 無宗教の老嬢の心理……………一四  
 趣味の家庭……………一四  
 私といふもの……………一六  
 櫻井鈴子様へ……………一七  
 水の 上(對話)……………一七  
 小説 言……………一八

三角の眼目次終り

三角の眼

百瀬しづ著

亡母へ

亡母様。あゝ！ お亡母様……ほんとうに。いくら呼んだつて、聞えはしませんわね！。すけれど、お亡母様 私は矢張り、あなたが戀しふございますよ。あなたにお目に懸りたい。たつた一目でいゝから、お目に懸りたい、逢ひたいと、思ふころは、何時だつて變りは致しませんよ。お亡母様が、あんなに急に私を置き去りにして、冥土へ行つてお了ひますつてから、けふまで九年の間、私は一日だつて、あなたのお上を忘れたことゝ云つては、本とうにございませんでした。けれど、それは日が経つて来るに従つて、その慕ひようは尠しづゝ薄らいでは参りましたわね。あのまア一週忌の間のように、毎日お墓詣りをして、毎晩、夜中に想ひ出して、あな

たにお目に懸りたくて、泣いて／＼泣き明すなどいふようなことは、左様何時までも爲ては  
ゐられませんがね……。正直なところですよ。あなたは今もう、死んでお了ひなすつた方。  
私は尙此世に生きてゆかなければならない身の上、而も、そんなにあなたのことばかり考へて  
ゐることは、お父様へ、お義母様に對してだつて、何となく濟まないような気持ちも致します  
もの……。全く、私は餘り／＼、あなたのことばかり、おなつかしく思つてゐた爲に、お父様  
やお義母様には、不孝に當るような行爲も致したような気持ちもされますわ。私もあなたと御一  
緒に死んで了はない以上は、矢張り、後に残つたお父様と、お義母様とによくお仕へするのが  
私の取るべき道であつたのでしたものを……。私は若かつたのですわ。……。私が若かつたとい  
へば、……。ねー。お亡母様、私はもう今年六つになる子どもがございますの……。可愛いので  
すよ。今に、暑中休日が來ると、私はその子どもの顔を見に行くことが出来ますわ。……。え？  
一緒にゐないのかつて仰有るの？ え、離れ／＼に暮してゐますの。何故だか、その理由

を……。さア、その理由は……。もう、その理由は訊いて下さいませな。

これが、これが私の運命だと思つて、何もかも諦めておりますから……。ねー、お亡母  
様。私が恚うして可愛い子どもに別れて暮してゐることも、他人といふものは、それアいろい  
ろに憶惻して、どうせ、良いようには申せませんが、でも、解つてゐて下さる方は、ちやん  
と同情もしてゐて下さるので、と思つて、左様氣にもかけませんの。この頃は……。私  
もだん／＼圖々しくなりましたわ。え、それア女だてらに、新聞記者なんかしてゐるのです  
もの……。

まア、全くでございますわね。昔、あのように箱入り娘にして育てられた私が、新聞記者に  
なるなんて、私自身にも、何だか夢のような気持ちもされなくてもありませんよ。けれど、これ  
もみんな、お亡母様があんなに、急に死んでお了ひなすつたのが、原因してゐるのぢやないかと  
も存じますよ……。まア、人の故にして、狡猾子だつて仰有るの？ ホホッ、でも私はこれを

決して悲んではおりませんの。決して、自分の歩んで来た道程を、私は悔んでなんかおりませんの。遂此の間も、あの木下のおち様の家へ上りましたら、矢張り左様云つて下さいましたよ。

『お前は、決して自分の歩いて来た道程を後悔することはないぞ。いゝ、大にやつてくれ。ほんとうに責任を有つて、俺はお前にやつて貰ふことがあるのだ……。』なんて……。おち様もお變りなさいましたわ。

ほんとうに、慙う申ては、御父様やお義母様、それから義兄や義姉にも申譯のない次第ですが、私は現在の境遇を、私のとるべき道の一番よい道であつたと、私は何時でも思つておりますの……。ですが、私が若しも順温しいく娘であつて、お父様の仰有ることをよく諾いで、一人娘は一人娘らしく、ちやんと、あの郷里の家に居るものとしたら。ねー、お亡母様。あなたの處へ、ちよいくと新聞社から婦人記者が（その頃婦人記者なんて郷里中に、一人位

なものでしたわね。尤もこの廣い東京にだつて、現在婦人の新聞記者といふのは、たつた十人位しかありませんけれど……。あなたを訪ねて来て、いろんなお話をきいて行つたように、私も、若い奥様の方へなんてつて、訪問をうけたりするのかもしれないでしたね。左様して地方の新しい思想の、捌けた奥様なんぞとして、平和な月日を送れたかもしれないわね。死んだ時は、また、お亡母様のように、『……何々婦人會の明星落つ……。』なんて標題の下に、私の小さな事蹟でも地方の新聞に大きく書きたてられるのかもしれないわね。あらつ、お亡母様。何も私はあなたのことを、馬鹿にしてるのぢやありませんわ。まア、厭な方……。えゝ！それは……。左様ですとも。何といひ合つたつて、血を分けた母子の間ですもの……。ほんとうに、まア母子といふものはね……。あのお亡母様が、私を置いてきほりにして、死んでお了ひなさる一月ばかり前に、随分二人は、つまらないことを云ひ合つても、たゞ譯もなく愉快になつて暮しましたわね。

あゝ！ 何ですか、そんなことを想ふと、頭腦がグラ／＼致しますよ。堪らなくあなたが戀しくなつて……。え？、嘸、苦勞も覺えたらうつて？ え／＼、それは苦勞をして來ましたわ。……お亡母様は精神的の御苦勞でしたね。けれど私はまアいろ／＼に……。ですが、もうそんな苦勞の談なんか癢ませう。兎に角、私は現在は氣樂に生きてゐるといふことが嬉しいのですから……。それにお父様も附いてゐて下さるのですもの……。何にも心配はありませんわ。たゞ、子どもと一緒に暮したいのですけれど、今、急に、と云つてはね。まア時機を待て……。とお父様も仰有つて下さいますの。子どもだつて私を慕つてますわ。子どもを育てゝゐてくれる以前の義姉さんから絶へず手紙が参りますの。え、それは安心ですわ。子どもは恁んな狭苦しい都會の箇中で大きくさせるよりは、あゝした廣い邸の中に、暢然とした山の氣をうけて、温い自然の恩典と、情深い人の懷に抱かれて生長してゐる方が、どんなに幸福だかしれませんからね。ですから、もう其點は安心してゐますの。え？ 女一人でゐて何か云はれは

しないかつて？ え、それはね、どうせ、無責任な人達は、随分下らない夫禮なかけ口をきいてゐないでもないようですけれど、もうそんな取るに足らないようなことを取り上げて、一々氣にしてもゐられないのですもの……。空にお月様さへ照つてゐたら、それでいゝと思つてゐます。若し又、そのお月様が一時曇つても、地下にはお亡母様が、ちやんと私を待つてゐて下さいますものね。私はほんとうに、死ぬといふことを、何となく楽しい愉快なこととして、何時でも心に畫いてゐます。でも、自分でわざ／＼死にはしませんわ。何故つて……。それはまだ、私はお父様やお義母様への孝道が一つも盡されてありませんもの……。それから可愛いあの子どもの前途も見届けてからでないと、安心ができませんもの……。第一母親の役目が完ふされませんもの……。左様して、まだその他に、他人でも——私はこの頃全く、他人ばかりの間に暮してゐるのです——。親切な方々、恁んな私でも、まア如何にか爲て世の中へ出してやらう。と爲てゐる下さる方々に對して、その御恩報じもできないうちに、勝手に死にたくな

つたから……つて、死んで了つたりしては、濟みませんわね——。

お亡母様。お亡母様——ですけれど、他人といふものは、矢張り頼りないものでございますわね。それは、ちよいと巧い言を云つてくれますし、親切らしくも行つて下さいますけれど。何を云つても、それはホンの氣持ち。ちよつとした感情の行きがよりかなんぞから、初まるのですから、又ちよつとした感情の行き違ひから、直ぐはなれて了ひます。何しろ無責任なものですから……。そこへ行くと、不思議なのは血肉の愛で、僻へ一時は、どのようなことを云つて離れぬになろうとも、いざといふ場合には矢張り、争はれない床しさの、美はしい情が湧いて来るようでございますね。

お父様だつて、私はお亡母様がお亡くなりなすつてから、何ですか冷たい心を有つて……。それは双方の間に……。ですが、もうこの頃では、この方より他には、この世の中に誰人が私の力になり、頼りになつて、私を護つて居てくれる人があろうか、といふことがよく解つて

來ましたのですもの……。ほんとうに、この世の中に親子の愛程、深いものが他にありませうか。夫婦の愛などいふものは、之れに比べると、全く薄いような氣持ちも致しますね。

その、他に比べようもなく堅い縁の、深い愛情の間柄である、お亡母様にも、現在はどうも何しようもないようなこの永別の悲境に置かれ、又その上に、可愛い／＼あの子どもにも、私は怨うして離れぬ／＼に暮さなければならぬのか、と思ふと、常日頃は、他人の中で、強いらしい事ばかり云つてゐても、全く、悲しくなつて了ひます。さびしくて、たゞ泣けて來るのですもの……。

亡母様。亡母様……。私は寂しふございますよ。……戀しい。あなたが戀しい。逢いたいのです。たつた一目でいゝから、逢つて、復た、昔のように甘へさせて下さいました。甘えて叱られて、私は左様してみたいのです。ね！。お亡母様。私はもう直きに、参りますよ。参らずにはゐられませんもの……。待つてゐて下さいまし。屹度。私は早く、一日も早くこの世で神

様が定めて下さいました丈の、私の御用を果した後に、私は急いであなたの御許へ参ります。ですが、あゝ！おなつかしうございます。お亡母様。もう、私は、泣けて、涙が、涙がこんなに、私の今、描いてるあなたの幻を、朦朧と、浸ませて、消えて失くなりさうにしてゐます。……もうこれで……。お亡母様。あゝ戀しいお亡母様……。

## 女の視た現代青年

今日の日本の社會は、誠に結構な物なのでせう。先づさう假定しておきます。けれども更にこの日本をよりよき状態に進めてくれる者は、今の青年男女で無ければなりません。將來の社會には、女子も男子同様、或はそれ以上に重大な任務を帯びるのが當然ですが、今は奥男子に對してのみの希望を述べます。所謂、満足が目でない、三角の眼で見た私の男子観ですから、それが間違つてゐたら、御勘辯を願ひます。

### その長所と短所

現在、青年といひ得る部類の男たちが、如何な思想を有ち、如何な行爲を爲し、そうして、一體に、如何様な風潮に流れつゝあるか、といふことは、私には、全く、窺ひ知る丈の、まあ、傳手と申しませうか、左様した一切の交渉を有たない爲めに、何と一口に申上げてよろしいのやら、見當もつかないのです。けれどたゞ平常から、何氣なく口もきゝ、いろくくと左様した



男だちの、お噂などをちよいくと伺つたりしてゐるので、たゞそれ丈の、狭い浅いこの私の見地から、御訊ねに對して、先づ忌憚ない御返辭丈を申上げて試ると致しますならば、それは一昔も二昔も以前からの青年と申す男達に比べて、現代の青年は、非常な變り方らしく、又従つてそこには長所や短所も多からうと存じます。

先づ、今時の書生さん、又は新進の何々といったような、年輩の方々は、昔の青年といふ男だちに、比べてみたら、非常に、賢くなつてゐると申されるでせう。まだ三十にも届かない年頃で、よくあのようなくとも考へてゐられる。よく世の中といふものを辨へてもゐられる。——と、昔の青年であつた、現在の中年男、又は——老境に立ち到つたところの男達は、屹度、思はれませう。

全く、現在の青年は賢い、馬鹿らしい夢を追ふて、徒らに空漠とした世界に走るといふことなどは決してないようです。何時もよく、この現實といふものから離れずに、凡べてはそこに出發點を置いて、進んでゐられるようであります。これは誠に結構なこととでに相違ありません。一體

人間世界には、何時の世にも、とは申しませんが、これからの世の中に、現實を離れて生きてゆくことはできないので、空漠たる夢幻を畫いてゐては、その精神は残つてゐても、その肉體の方が固濁して了ひませう。肉體が固濁しては、如何なる高遠な理想も、實現させる術はありません。此點に於いて、現代の青年が、早く、この生活といふことを考へて、そこに土臺を置くといふことは、矢張り賢いやり方でありませう。

けれど、又何事もその度を過ぎると、缺點も出て來る譯で、左様した賢い、現代の青年だちは、餘りに、その生活といふものに、早くから、脅かされ、考へさせられすぎてはゐないでせうか？ その爲に、國家社會といふような觀念は尠しくもなく、たゞ、自己を發達させたいと希ふころ、又は自己のみの安逸生活を考へて、何事も世の中は樂におもしろおかしく暮すが得策だと、いつたような思想に傾きすぎてはゐないでせうか？

各自の自己を發展向上せしむることは、それはやがて、その國家社會を進歩せしむる方法で

あるかもしれない。が、私は、餘りに左様した考慮がかちすぎてはゐないだろうかと思ひます。まだ一步も世の中へ、踏み出してもみない青年は、矢張り、昔のように、破れ袴に破れ帽子を戴いて、往還を平然として濶歩したり、冷い下宿の粗飯に舌鼓打ちながら、天下國家を論じ合つたといふ書生氣質の方が、どの位、青年の意氣が見えて頼もしかつたでせう。その論ずるところ、その行ふところが、よし雲を掴むやうな空漠たる物であり、又大きな失脚があつたとしても、左様した若々しい熱の充ちくた意氣の力と、純眞な心情とが、眞實に尊いものであらうと思はれます。

何事もよく解つて、すつかり納まつてゐるやうな、現代の青年は、非常に老成のかけが見えて、大邊頼もしいように思はれます。併し事實は、決して、その解つて、納まつた外見程に、頼もしいものではありません。徒らに、文明の香に酔はされて、センチメンタルな、動搖し易い、生活といふものにも追はれ易い、枝葉ばかりは美はしいが、ぐらくとして根の朽ちた

樹木のような感じがされないでもありません。慙した樹木に生涯を、縋つてゆかなければならぬ、若い婦人だちも亦、心細い念がせずにはゐられません。

まだ書生さんで、親がりの中である青年、紳士は、ハイカラです。なか／＼氣の利いた容姿もしてゐれば、氣の利いたことをやつてみせ、云つてもみせます。又左様いふ時代は、凡べの理想も高く大きく出られます。時代の風潮に、おくれまる／＼としてゐる男達は、如何にも立派で、文明の理想的な國民であるように思はれます。

併し、一旦、その男の境遇に、何かの變動をみた時、左様した凡べての面影は、失はれずにあるでせうか？ その、女性らしい心情は、どのように、惨じめに打ち挫れて了ふでせう、一向、頼りにもなりません。又お金、地位といふものゝ力が、左様／＼強い權威を示して、凡べての人間を支配し得るものでもないでせう。

人間の心に、眞摯な點が缺けてゐる爲に、慙うした思想が生れるので、殊に、純眞にして、

たゞ若い力に、充滿ちてゐなければならぬ善の青年だちの間に慙んな思想の蔓つてゐるといふことは、ほんとうに惜しい、そうして、今に、取り返しのつかないことを生み出すのでないかとも思はれます。これは、時代の推移に依るものでもありませんし、又我國民性の、その時代の自然の潮流に形づくられてゆくものでもありません。先づ、男子は、殊に青年は、青年らしく、もつと潑刺とした氣概があつて欲しいと思ひます。

男だか女だか、解らないような人々は澤山あります、女性がその特有のやさしみや、温みを失つて、男子を凌いで得意然としてゐるのも、見ぐるしいものでありますけれど、男子が——若い男達が、女性の眞似をしたような、氣障なよそほひに、意氣地のない随弱さや、輕卒極まる、ケチ臭い心情をさらけ出してみせられるのは、餘り氣持のよいものではありません。

男子は男子らしく、青年は青年らしい若さを云して、左様してそのような賢い基礎の上に立ちながら、自己の發達から、國家社會の觀念も、平常に忘れずに、弱きものゝ女性も共々、引き揚げてゆかれないものだ、と存じます。

### 新聞記者といふもの

『ハア、左様ですか。ぢやア、又よく部長と相談して置ませう。……それで大體申上げて置くことは、まアこの位のもですが、お解りになつたでせうか。』

何だか、霏まじりの雨でも降り出しさうな、肌寒い日の夕暮れ時、私は縁續ぎになつてゐる郷里の或人、から復た其社の社會部長に宛てた一枚の名刺を持つて初めて、這入つてみた新聞社の應接室に、今、部長は不在であるから、私が代理にお目に懸らうといつて、出て來た一人の社員と、慙うして、これから、就職しようとするその社の婦人記者の役目を大體聽かされ

たのでした。

『ほんとうに、お役に立ちますか、如何ですか、心配なんでしょう。何にいたせ、これが初めての経験なんでしょう。』

私は、ほんとうに、どんな難かしい仕事を爲なければならぬのか。と、心配でならなかつたので、恚う訊きました。

『なアに、決して御心配には及びませんよ。お馴れになれば何でもない仕事なんですから……ですが、また如何して、新聞記者になんぞならうとは、爲さるのです？ 餘りいゝものぢやありませんが……。』

『えゝ、初めから決まっていゝものだなどゝは、思つておりませんから……』と、云つて笑ふと『左様ですか、それぢや大丈夫でせう。』

先方も恚う云つて、皮肉さうに笑ひました。その社員は、もう十年近くも新聞記者をやつてゐるのに、兎に角、部長のお代理役も勤めようといふ丈に、もう、新聞記者の型は私でありますといつたような態度でゐられた。私は最初で、何が何やら解りませんでしたけれど、その社員の態度が餘りいゝ氣持ちは爲なかつたので、これから新聞記者になるのも、考へものだといつたような氣持ちは爲しました。けれど、この間際になつて、そんなグラ付いた考へも抱いてはゐられない。と、それで先づ、案外容易く就職の能きたのを喜んで、その日はそのまま家に歸つて來たのでした。

それから、私の職業は決まりました。最初、三日か四日目位に出社すればよい、といふのでそれは其社が焼けた後で、まだ普請中でしたので、私の坐る机も無いから。……といつたよう——。な譯から、そんな風に決められたのでしたが、『大變時間の餘祐があつてよい工合でした。』

『その代り、貴嬢の御存知の範圍で、何か新聞記事になるようなものがありましたら、どうか

書いて下さい。此方から。用事をお頼みしなくとも、其方から仕事をお出し下さい。」と、社会部長はよく云はれました。

社会部長といふのは、非常な精力家らしい、温容な仁で、私はその人に逢ふ前から、あの人に使はれるのならよい。あんなもの、解つた仁は無いのだから……などいふ噂をちよいとくきいてみましたので、この人には、最初、部長のお代理だといつて、出て来た新聞記者然とした、あの人とは反対に温い感じを抱いてゐた譯なのです。

先方から命令しない仕事を、自分で拵へてゆくのが、所謂、得種とかいつて、斯社会の人達は、大變喜ぶものだとかわかつてから、せい／＼私もその得種をつくることに心がけましたが、さア、容易なようで難かしい職業で、左様／＼、他人の迷惑な、そうして後で此方にかゝつて来るような否難までうけて、そんなものをつくり出さうとも思はれませんし、又なか／＼この職業に對して不親切で、折角、時間と、努力と、又多少の費用とを費して、訪ねて行つても、

ケンモロ、に取扱つてくれて、全く凡へては徒勞に歸して了ふようなこともよくあるのした。併し、それでも明朝の紙上に間に合はせなければ、他の新聞に負けて了ふといふのですから、之れもほん／＼に面倒臭い點なのです。

『新聞記者といふものは、云ひもしない談や、ありもしない事柄を事實らしく、仰山に發表する厭な者だ、恐い者だ……』なんて、人からは馬鹿にされたり敬遠主義を取られたりするの、みんな其點にあるのです。この職業が厭だ、辛い、といふのも亦其點なので、新聞を編輯してゆく記者と外交に出かける記者との間に、よく衝突の起るのも、みんな恚んなどところからなのです。

ですが、又無理もありません。社内で編輯してゐる人々は、『コレ／＼コレ丈の仕事、あの人拵へる。この位の記事にする。そこで、恚／＼、編輯して了へばよい。それでよい。そしてたら早速歸宅つて懃まう。』など一人で考へてゐるのに、『へえ、今日はどうも、あの博士もお

留守、此方の夫人も御病氣とあつて、何にも書くことは有りませんが……。』なんて、それを云ふ方も、つまらない無駄骨折つて。と思ふけれど、それをきく方は、餘計うんざりするには決まつてゐます。

『併し、何か書けるでせう。何にも書くことはありませんか。何か書いて下さらないと明朝の新聞が出来ませんから……。』『慥う云はれてみると、勢、何か書かずにはゐられない。何とか其處丈の紙面を埋めてゆかなければならない。と思ふと、よくしたもので、何か書くことは出来て来るのです。さア、これが良くないので、翌朝、その新聞紙を展げてみた人たちは、『まア面白いことが出て居るね。なか／＼この新聞は手がよく行き渡つてゐる。』活動してゐるなんて、感心して見る人だちもありませうし、又新聞側でも、翌日は、もう今日といふものゝ仕事に追はれてゐるので前日のことなどはよく考へてゐない、案外平然としてゐるのです。が、若しその記事が、酷く誇張してあつたり、事實が違つてゐたりすると。書かれた御當家御

當人だちは、餘りいゝ氣持ちはしません。それどころか、すつかり憤つて了つて、もう新聞屋には逢はない。新聞屋が來たら、何でも多くもの云はずに、早く追拂ふことを考へる。なんて、家中にお布禮が出ることもなるのです。

玄關拂ひ。えゝ。よくあることですよ。私なんども、以前にはこの世の中で、玄關拂ひを喰はされるのは、まア、もの貰ひ、位なものだろう。と、思つてゐたんですが、近頃すつと殖えましたね。癩兵のもの賣りに、食客を望む食書生に、新聞記者なんてね。

この玄關拂ひといふのが、最初は随分、腹も立ちましたよ。口惜しくもあり、悄氣でも了ひましたけれど、もう度々、そんな目に逢ふと、平氣になつて了ふので、『なアに、行きさへすれば、玄關からだつて、臺處からだつて、何か取つて来る。つて、まるで泥棒みたようですね。』——轉んだつてたゞは起きな主義で、矢張り何か書いて了ふのですから、若しも、この新聞記者といふ厄病神に取りつかれたら、矢張り、おさし支へのない限りは、快く逢ひもし、談も

して下さる方がよいのです。先方が左様、ものが解つて出て来るのに、此方だつて、何でもかんでも……などは申されません。『あゝ左様でございますか。では、何も書きませんことに致します。ハイ、またどうぞ、おさし支へのない場合にはお知らせ下さいまし……。』どうも失禮申上げました。どうぞまた、千束な者でも此後お見知り置きを……。なんて、職業の他の情實まで、からんで来て、歸社つて、編輯者から、どんなに睨まれても、もう其時は、何にも書く氣にはなれないのです。慙うしてゐるうちには、先方でも亦『なんだか、普通の新聞記者らしくない人だ。人柄で、穏順しくて……。』と、いつたような工合になつて来て、また、それこそおさし支へのない場合には、非常な便宜も計つて下さる。といふ譯で、却つて、それが得種を生み出す、といふ次第になつて来るのです。

新聞記者は顔が廣くなくつちやいけない。いゝお得意先を澤山有つてゐなければならぬ。なんて、よく云ひますね。それア、長いこと、記者をしてゐれば、自然と、顔も廣くもなりま

せうし、所謂、いゝお得意先も出来ようといふものですけれど、さて、この人生——この社會に、常に胚胎し、膨興して来る事柄は、左様、變つたの。といふ譯にはゆきませんから、仕事はまア繰り返しながら、その間に、些かづゝの變化か進歩かを見てゆくのせう。ですから、まア慙んな職業を左様長くやつてゐたからつて、たゞ古い人だ。といふのに過ぎないので、その中には新聞社の机の上にはばかり嚙り付いてゐる人々は、次第に頭が古くなつて、一昔も二昔も以前に所謂、新聞記者氣質といつたような、變挺な臭味が抜けない人物になつて了ふのです。

いえ、併し、これはたゞそんな人になつて了ひはしないか。との私の懸念にすぎないのです。何も私は現在、長く新聞記者をされてゐる方々に對して、慙んなことをいふのぢやありません。毛頭そんな考を有つてはゐらないのです。それに、同じ新聞記者と申しましても、それはくゝいろいな方がゐられます。まアどのような社會にだつて、金剛石もあれば瓦もありませう。ですから、私のような丁度その瓦のようない、謂はゞ新聞記者ともまだ申すのには、お恥かしいよう

な、婦人記者の一人から、決して勝手な観察の眼は向けられません。たゞ前に申たような事は、主として外交方面も社會種の最初の方、まア私のような、下廻りの得た経験にすぎないので、それから、そんな野暮なお方もないでせうが、大いに、同業者を侮辱したものだなど、お立腹のようにお願ひ申します。

兎に角、新聞記者と申す者は、社會教育に係はつてゐる、輕からぬ使命も帯びた職業ですからなるべく人格の高い、そうして又敏捷にしてよく考へ、よく働き得る人物でなければならぬのでありませう。

## 高襟と蠻殻の好例

武者小路子の御兄弟

華胄界の中で、秀で、才物と稱はれ、やり手と申され、又所謂、さばけた御前様と申上げた、いようなお方は、數あることでありませう。

徳川家一門の方々が、各方面に亘つて、平常に諸民の爲に發展向上の途を示されたり、某侯爵が演藝に近頃、意を注がれたり、その他何々伯爵、子爵男爵などの、政治や武術の方面をばなれて、その御自身の御趣味からのみでなく、大きくは一國の文藝といふものに對して、熱心に、進まれた御意見の御示しを爲て下さることは、ほんとうに私共の感謝いたさねばならないところでもあります。新聞記者といふ職業は、時には前申たような辛い厭な念も致さねばならぬ代り、又一枚の名刺を以つて、かゝる人々に面接し、さまざまの御意見を伺つたり、又一度その信用を得れば、所謂、成上り者といつた人々には見られないところの奥床しい有難い御心榮えや、その御平生の私生活振りなども、親しく窺ひ知るを得るようにもなりました、少しは世間も弘くなつたのかと。自分ながら思はれるようなこととございます。



こゝに、さて同じく御兄弟でゐられました。恐ろしく高襟な感じのするお方と、蠻般な感じのするお方とがございます。そうしてお二人ともに、世にまた秀でられたところもお珍らしいではございませんか。即ち、

武路小路子の御兄弟——兄君の公共子は、現在外務書記官で本省詰め、毎日元園町のお邸から霞ヶ關のお役所まで通はれてゐます。御弟の實篤氏は、昨年九月から日向國本城村に、新らしき村」の理想郷をつくられてゐます。このお二人は、人々が丁度、高襟と蠻般の極端であるかの如く申して、その逸話なども随分あるようですが、此處には婦人記者らしく、私がお二人にお目に懸りました折の印象丈を申上げることには致しませう。

私が昨年九月、我孫子の御別荘に實篤氏お夫妻をお訪ねいたしましたのは、如何にも初夏らしい感じのする、快く晴れ渡つた日の朝でありました。

『おい、お前の方のお客様が見えたよ。早く其方へお通し申さないか……。』と、少し濁みがつた太いお聲で申されたのは實篤氏でした。

『ハイ、誰方？ あゝ、どうぞ——』慙う云つて、折からお召替にか、長い帯を結びながら、お立關の方へ出て來られたのは、まだ一層お嬢さんといったような感じのする房子夫人でありました。私は、先づお座敷の方へ上つて、其處に長くなつて談してゐられた御主人と、木村莊太さんとに御挨拶をしました。その時、初めて視た實篤氏は、銀縁の眼鏡をかけたお鼻が低くて、何だかクシャ／＼としたような、黒い長いお顔の方で、何となく困つたような態度で、一つお辭儀をなさいました。私は、これが長い間、白樺の誌上や、又その他の紙上で、そのお書きになつたものを拜見し、尠からぬ尊敬の念を抱かされてゐた武者小路さん。であるかと、少々變にも思はれましたけれど、さて、一旦崇拜した人といふものは、又何とでも考へられるもので、その如何にも他人との應對がお下手らしい點や、朴訥らしい眞摯な態度やは、凡べて、尊い、それが偉大な藝術家の型として、矢張り悪い感じは、何處に一つ見出されなかつたので

した。それから、私はその日、房子夫人のお居間の方に一日を遊びさせて戴きましたが、實篤氏は、一度ちよつと此方へ出て來られました。多くは莊太さんを相手に何か談されたり、書きものをしたりなどのようでありました。そして、その日の夕方、御親切な房子夫人に御案内をされて、美はしい手賀沼から初茸がとれるといふ小高い松林續きの岡をながめながら、三四丁程、離れた志賀直哉氏のお宅へ伺ひました。武者小路氏の御別荘が廣い平地に建てられてあるのに對し、これは非常に高低のある地處内に、お子様方のお座居や、立派なお書齋などが建てられて、一體の眺めは誠に結構なものでありました。房子夫人の御紹介で私は又志賀氏の御夫妻にお目に懸りました。その御書齋らしいお部屋には、何だか澤山の若い男たちが、御本を讀まれたり、アルバムを廣げられたりして、何れも夕食前の雑談時間といつたかたちでありました。そして、眞中の廣い卓の上に置かれた、碁盤の向側に、立派な、併しやゝ氣難かしさうな志賀氏の御顔と、額をつき合はせて、片手に白い碁石を掴みながら、考へ込んでゐられる

男の背後姿は、何時の間にか來てゐられた、實篤氏でありました。が、矢張りその時も餘り談はされずに、たゞ人の好きさうに微笑んでばかりゐられました。

その後、お目に懸つたのが、此間の白樺十週年紀念の爲に、上京せられました折、元園町のお邸へお訪ね致したのです。

「ハア？ 實篤さんの方ですか、被入いますよ。」と、元園町のお邸は何時伺つても、全く平民的で、そして矢張りお公家様。といつたような奥床しい感じがされるのです。

「あゝ、房子ですか。此間少し病氣をしましたが、もう癒りました。えゝ、元氣ですよ……。」何しろ豆腐やへ三里、酒屋へ五里といふ處ですから、最初は。房子も少々閉口したようですが、今ではよく働いてゐます……。」と、その時の實篤氏はよくお談になりました。そうして一層お色も黒く赫々として、如何にも黄塵の街を離れて、美はしい自然に圍まれ、樂はしい理想郷に暮さるゝお方らしい、一層の尊さ、床しさが、充ち満ちてゐられました。

私のお目に懸つたのは、たつたこれぎりでしたけれど、その印象は深く、刻まれてゐます。多分、今頃は遠い筑紫の果の一割、新らしき村の美はしき天地に、愛らしくも勝氣なあの子夫人と共に、楽しい人生を味いつゝ、いよくその高い御理想に向つて進まれてゐることでありませう。

『武者小路公共子は日本一の好男子、日本一の高襟だ……』と、申すことを、嘗て、江木欣子女史が、何かの雑誌に書かれたとやらで。何となく左様した觀念も芽ざしてゐましたのに。

『左様、小村侯の方は優方で、武者小路子の方は、所謂、好男子、立派な男といふのであらう何れにしても外務省の花形だ……』など、さばけた御前様の小笠原伯から、慥んなお言葉も伺つてゐました、私は一日、外務省の一室に、眼近く接した折の、公共子は、何だか、考へてゐた程、高襟な好男子とも思はれませんでした。併し、飽く迄、品よけに、整つたそのお顔立

は、全く、一ツく刻んで取りつけた程に、整齋の美を示してゐられました。私は餘り整ひ過ぎてゐる爲に、些しも餘裕がない。味の薄いと、いつた、感じを、先に直観して了つたのでせうが、まアそんな他人様の、お顔の批評ばかり申上げてゐるのは、ほんとうに失禮です。これは全く、自分が、他人様の批評をなし得る丈のお面相を有たれた方々の、遊ばすことでした。慥うして、私は、この後もをりくお目に懸りました。實篤氏が初め、困つたような態度で挨拶されましたことや、凡べて無交際な、眞摯な藝術家らしい態度に引きかへて、公共子は、飽く迄若手の外交官らしい、他人との應對振りや、華族などいふものを氣取られぬ、如何にもさばけたお取り扱しの中に、又争はれぬ氏素性の氣品とを示されてゐるその全體には、又多少高襟と疊殻の對照にも擧げられし所以を、考へない譯にはゆきませんでした、左様して、私が最もこの公共子を、所謂、日本一の立派な男子として、お見かけ申したのは、此一月の十四日。東京驛は、本野盛一子夫妻と、西園寺新子夫人の巴里行きを見送りの、紳士淑女で山の如

く集はれました折から、私は西園寺夫人の御乗客車中から、ブラットホームを見廻はした時。多くの人々の中に、流石に優れて眼立たれし貴公子は、矢張り、この武者小路公共子のお容姿でありました。

### 各國劇場から観た婦人

外務書記官 武者小路公共

●私は獨逸伯林に最も永く居りましたが、其間も暇さへあれば大抵オペラを聴きに行つてゐましたが、一體に獨逸の劇場内は非常に暗くて、カブリ付へ入つて舞臺の明りで僅かに其クブレットが讀める位のもので、其演出するものも亦ワグナーのやうな重みのある暗いものが多く、それを觀聽する人々はなりふりに構はず非常に熱心に中には手帳など出して研究しながらの人もある位です。

●ところが、巴里の方へ行くと、劇場内は非常に明るく華麗を極めたもので演出するものは多く伊太利の上品なもので、觀客は何れも盛装して幕間には美しいボンネットがシルクハットに交つて床しい香を放ちながら廊下を行き交ふさまは、何となく浮々とした歡樂の氣分を與へるのでした。

●また倫敦の方は劇場内も左様に暗くも明るくもなく、演出されるのは重にミューヂカルコメディー（喜歌劇）のやうな軽い明るいものでそれを觀聽する人達も亦た手輕な明るい氣持ちで、楽しんでゆくといい風に見えます。

●露西亞の方は一寸獨逸に似たやうな點もあるが、また其處には自ら大國民性の餘裕が非常に現れてゐました。

●斯く歐洲に於いても各國とも其氣風が異なつてゐるので、嘗て佛國の名女優マルセルプレボーが伯林へ聘ばれて行つた時、『どうもこゝは芝居をしてゐるのではなくて、學校の教師にでも

なつてゐるやうな氣がする』と申したとか、全く獨逸人はその頭腦が明晰で、常に事物に研究を有す。ホペラなどをさへ單に樂むといふのではなくて、深く研究しようとする。誠に其心持は吾々の嘉すべき點はあるけれど、人間の神秘的な美しい情緒といふものが更らに無い。即ち餘裕が少しもなくて、加何にも成上がり者の感じがするのは、現在この戦争に於いてその戰略謀策等に優秀な點があるにも拘らず人々から眞の同情を得ないのと同じ事のやうに思ひ合されるやうであります。

斯く各國に比して吾國劇場内の氣分を視るに、これは誠にその劇場や役者等は彼地の末流のところと同一なるにも拘らず只綺羅を飾つて芝居などは熱心に觀ず、殊に婦人が子供などを連れてゆくのは如何なる譯か一向解されない。要するにまだ非常に其觀劇法が幼稚であると云はねばなりませんまい。

## 名流婦人の生ひ立ち談

### 西園寺八郎氏夫人

柱を嚙んだ笑ひ話

學校の門の柱に長いこと

齒のあとが付いてゐました

『私は兄妹がなく一人でしたので我儘になつて不可ん云ふので六歳の時から神田の佛英和女學校の寄宿舎へ入れられてマアさんの教授をうけましたのに、父が永年佛蘭西に居りましたのであちらの子供が用ゐます本や玩具などを送られて自然に佛蘭西の小説なども面白いと覺え初めたのかもしれない。けれど、性來忘ける者の私の事故、趣味を有つなどゝ立派な事は申されま

せん、其神田の學校に私が最初通學で参ります時分の事私は迎ひの者が遅いとか云つて學校の丸い大きな柱に掴まり大聲を立て、泣く中に其柱を噛んだと見えて、遂に五六年前の學校が焼ける迄其跡がペンキの中に附着してゐましたので、何時も何時もマアさんや友達の笑ひの種となつて困りました、まアそんなに私は利かない子供であつたと見えます」と話られる夫人の面ざしは左様した思ひを裏切る程な婉やかさに、父君陶庵侯の面影を寫されて氣高く又艶やかとも見受けられる。

「左様ですね、父は何れかと申せば放任の方で私も叱られたといふ覺えは一度もありませんがそれでも恐い仁だとは思つてゐました」

「只今は？」

「只今でも恐いかもしれませんが」と夫人は快活に笑はれる。夫人は亦五人のお子方の教育にも意を注がれて、學習院へ御通學の令息お二人が機械類の玩具が豫ねてお好きと云ふ所から此

お正月には小さな各自の年賀の名刺を自分で印刷させて見たたのお話や、又園藝ではスキートピーヤ小菊、日本の櫻草など培養されて、來月末に新芽が出、やがて美しい花が咲くとのお楽しみなど慎しやかに談笑されて、現代式快活な中にも氣高き御心榮こそ洵に御珍しき平民的貴婦人である。

### 三宅花園女史

娘の頃は夫のお轉婆で

月夜に取つて投けた大男

「私は子供の時から随分變り者で、生家四邊は御承知の通り平常に諸藝人が這入つてゐて、私にも父母は様々な遊藝を仕込まうとしたのですが元來嫌ひで人に隠れて押入へ光線取りを拵へ其中でいゝ豆を喰べながら好きな書物に讀み耽つて許りゐました。學校は當時跡見さんの經營

されてゐたバラ學校、明治女學校、女子學院等一寸々々と喰ひ嚙りましたが中島歌子先生の許へは「牧の落葉」の遺稿を出した故江崎まき子さんなどと最初の弟子で或時御稽古後に五目鮎を戴いて其お皿に認めてあつた「赤壁の賦」を讀んでゐると、今日一人の弟子入があつたといふので、見ると、髪の薄い小作りな娘さんで其處へ来てお皿の賦を直に語讀りましたまア生意氣な女だなどと私達は笑ひましたが、それが樋口一葉女史で、なつちゃん、たつちゃんと云ひ合つてそれから懇意になりました、よく半井さん。お噂ばかりしてゐるので、私達は冷笑したり憤慨たりしましたが早迎で惜しい事をしました、それから生家も不運に傾き私は當時明治女學校の星野先生に柔術を習つてゐました、或月のよき夕番町の錢湯から歸途を獨り歩きしてゐますと、背後から勞働者らしい男が三人許り隨つて來て私の袖を引つ張りました、私は此處ぞと日頃鍛練の柔術の手を一寸出すと、忽ち大の男が一人私の前へドサンと倒れました。それで私は腕前には得意でしたがア後の仕返しが恐くて門内へ驅け込み復たソツと門外を見ますと

二人の男は逃げ失せ一人の男は私の手拭をぶら下けてやう／＼起き上る處でした。私はほんとに左様に御轉變なのでした。それは廿一歳位の時分で別に結婚する氣もなくなりましたが。間もなく巖本善治氏の御勧めで三宅家へ嫁ることになりましたのです。

### 福井菊三郎氏夫人

#### 江原素六翁の愛嬢

#### 富士の裾野で茶摘もした

「富士の裾野、沼津在で金岡村といふ處に十八の春まで生ひ立つた私は全くの百姓育ちで何も存じませんが今以つてからだの丈夫なのは其お蔭でもあるかと存じます、御存知の通り父（素六翁）は極く嚴格な仁で、私達にも兒供の時から遊藝など習ふよりは按摩でも習つて置けといふ風で、毎日一里餘りある小學校へ通ふ傍らには村人と共に田園へ出て畔豆を植えたり。白い

手拭、赤い襷で茶畑へ出て茶摘み女にもなりました。ですから農夫が何れ程骨が折れるか、又楽しいかといふ事はよく解るのです。そんな風で父親は子供の中には只もう暢然と丈夫に生立ち、女は家政の事舅姑に仕へる事、まめくしく立ち働く事のみを注ぐやうに育られました。宗教はもう學齡時代の折から沼津の教會まで毎日曜には連れて行かれて深く教導されました、小學校が濟むと静岡の女學校へ三年程参ります中に福井家へ嫁して丁ひましたので、俄に上京して様々な世間を見る事になり随分困る事もありましたが、父は何時も何時も海外に居ります時寄せます書信にさへ、女の道を必ず忘るゝな、勝手元を清潔に家をよく修めよと申す風の手紙許りです。嫁にやりましたお菊なども（昨年石黒九一氏と結婚されし令嬢）お祖父さんには随分厳しく世話をやかれました、其故か、遂此お正月長崎の轉地先へ案じて私が見に参りましたが、まア大層險約に致して居ります。遂本日石黒さんから電話で、お菊からの手紙には「瓦斯代、食料お家賃が幾何で毎月貯金が出来る……」などマア可愛さうやら感心やら涙が出る様ですとの事でした」と語られる夫人も嬉しさうであつた。

## 矢島揖子女史

大酒家の良人の下に

十年間の苦しい月日

今年八十七歳の高齢に達し乍ら尙矍鑠たる態度を婦人矯風會の樓上に起臥せる矢島揖子女史は人も知る四十歳にして初めて眼覺の奮闘獨立の境に入られたのである。女史は其前半生の思ひ出を断片的に語られる。私の生家は肥後の熊本在の郷士でした。兄が一人に姉弟が七人、兄は其土地の時習館へ通ひ女兒は家で種々修めましたが姉は家政學が巧みで、横井時雄氏の母堂妹は裁縫が上手といふに私は何より書物が好きで毎日修めさせられる三味線が大嫌ひでした處が當時、江戸表で水野越前守様の御觸れで一般の身分なき者は遊藝差止めとなりましたので



私共は修めても差支ないのでしたが、まア好い御觸れだと早速止めさせて貰ひ、それから毎日夜、兄から大學、父から小學、母から論語を習ひまして他の妹達に教へたりしました。その後、十二の時私は隣村の従兄の家へ嫁にやられました。夫はもう、大の酒飲みで其爲に私はまア今思ひ出して辛いく、十年間を送りました。繼子が四人、私の實子が二人、父親は晝夜の分目なく酔ひどれて誰が迎ひに行つても歸宅せず兒供が自分の身體と同じ位の弓張り提灯を下けて夜道をトボ／＼父親の正體のない姿を迎ひに行く容姿は私は幾日幾夜涙の眼で見やりましたか、で遂に私は右眼の明を失して悲惨な境に立ちました。云ふに云はれぬ思ひをして離籍をし上京の上、幾久しい艱難を経て今日に到りましたが、私を抑宗教の尊い道に引き入れて下さつた最初の第一人者はあの方です。と女史は悲しい追憶の夢より醒めし如く居室の壁上に掲げられし額面を仰ぎ見られた。それは早や故人となられしかのツル―女史の若やかなる小照であつた。

## 佐々木政吉博士夫人芳子女史

お茶の水小學校へ通はれたその頃

「私は慶應三年八丁堀に生れて寺子屋の教へも少しはうけましたが、間もなく駿河臺の此家に引取られたのでお茶の水の學校へ通ひました、其頃は極く最初なので九條家の御當主なども男女一緒に随分皆オハネでした、現今の橋の所が土手で籤が繁り合ひ、私達は道草など摘みながら大廻りをして學校へ行きました、女の西洋人がオルガンを弾くと大きな姿をした私達は現今の幼稚園で唱つてゐる「春の彌生」や「雲雀」位な安易な歌を幾日も／＼かかつて習つたものでした、小學部を卒業すると後は家で厳しく仕込まれましたが、禪學には子供の時から父母と共に信仰を有ち、今日に至る迄何十年間青松寺の北野老師の御説教に感銘してゐます」と語られる折今學習院からお歸宅の令孫順子さん、夏も冬も通される袖、紫色無地の服装は色白の丸顔

を上品に見せる、順子さんは今、梨本、山階の姫宮様達と御同級の中學部四學年で、文學が大好き、小説類は嚴禁されてゐるが、漱石全集位は買つて戴き度いとのこと。  
一上の孫二人を私が預つて教育してゐますが、まア餘り學者になれるよりは嘉悦先生に御願ひしてお掃除やお勝手仕事を上手になつて貰はうと思つてゐます」と、いともお睦じい家庭である。

## 比志島中將夫人

踊りが上手でした……

御轉婆でも毛蟲が大嫌ひ

木登りだけはしません

「私の生地（愛知縣名古屋）は御承知の通り遊藝の極盛んな處で母や姉も致してゐました處か

ら自然に私も習はされ又餘程好きであつたと見えます何でも三歳の時に西川の浚ひがあつて、私は見守の踊りをやりましたが、何しろ三ツ許りの子供故踊りの最中にバタリと轉んで了つたが、別に臆せもせず轉んだままで足を張り兩手を頬について身振りをして下方に合せて踊り抜いたといふので其時小八重といふ師匠が大變感服して了ひ、それから一心に私の諸藝を仕込んでくれた。これが私の身を不幸にし又幸にしたのだらうと存じます。まアそんな風で遊藝には何に依らず趣味を有ち例の美音會などにも引張り出されたり、又一時御自慢の柳原伯の義太夫でさへ私に丈はまだくと云はれて遂伺つたともありませんでした。けれど、今ではもう何一ツ出来はしません、其代り私は幼い時から算術などの學科は大嫌で、何しろ名古屋で生立つ頃は寺小屋から白川小學校といふのに移り、あの棚橋絢子女史が裁縫と國語などを教授されてゐました、時の知事が今の後藤内相夫人の御親父、安場男で其お嬢さん達が御入學の爲めにと、高等科といふものが出来たやうに覺えてゐます。お轉婆では随分名高い方で、男鬚に紺足袋

淺黄の半襟といふ扮装が最も似合つた程だと申しますが、日賀田さんの奥様のやうに木登り丈けはしませんでした、何故と云つて、私は毛蟲が何より嫌ですから……。今は尙侯爵夫人の、小笠原伯の令妹お百様がよく「一寸此方へおいで遊ばせ」と仰有るから參ると美しい掌に毛蟲を掴んで被入るので、其時許りはあのお可愛らしいお百様が大嫌になつたりしました、まア大變皆様のお噂許りして了ひましたね寒い折からもう此邊で口を噤みませう。

## 三輪田氏夫人

男尊女卑の極端な鹿兒島社會の血に生れて

「堅苦しい教育社會にのみ身を置いて來た私は、何の變つた面白い思ひ出もありませんが私の郷里鹿兒島は恐ろしく男尊女卑の土地柄で、女は決して學問などするな、唯女藝を勵めよといふので、勝手元の整理は固より機織……例の薩摩緋のやうな平常着物は何れも各自の家で女が

織りました、女は卑しい者、汚れた者、それ故に着物の春筋でさへ男は左へ折るが女は右へ折つて男と同格でない事を示したり、女は必ず立關から出入せず裏口から小さくなつて出入りした位のもので、私の母親が父と共に私の幼少の時、其男尊女卑に壓へつけられてゐた鹿兒島在を一步く踏み出して來るに従つて、他國の女が左程に卑下されてゐぬのみか何れも相當の學問、見識もあつて、世間が廣いに深く驚き、且つ途上に書いてある廣告一ツ讀めぬ自分の悲しさを悟つて、どうかして娘にだけは出来る丈けの學問を仕込み、自分のやうに人後におくれて悲しい念をせぬやうにとの心が決められたのださうです、父も又同様な心持で私を當時女子の最高學府たる高等師範へ入れるには、矢張り女子師範へ入學させるがよいとの事で、それ故に私はまるで師範學校許り續けて來たのでした。併し其内も私が高崎へ入學した際に、それを知らずに永眠して了ひましたのは今以て残念な思出の一つと存じてゐます土地の因襲を打破して來たやうな私の身の上が計らずまた結婚することになり、慙うして幸福な月日を送れるの

かと思ふと不思議のやうにも思はれます」と。御姑の眞佐子刀自はもう萬事賢明なお嫁さん任せの閑日月を送られ、夫君元道氏は忠實に學務に勤められ、數多のお子方は此優しいお母様に仕へられて、三輪田一家は冷たい風の如月の朝も、花咲く春の如き心地がされてゐる。

## 信綱博士夫人

薙刀の試合に牛若丸の扮装を……

信綱博士が見そめられた……

廿餘年前の藤島雪子嬢、現今は佐々木信綱博士の奥様、御長男がもう一高在學中とは思はれぬ程、小作なお若い方、木曜、土曜の他は美しいお弟子達の姿も見えぬ西片町の應接間で夫人はニコヤカに語られる。

「私も子供の折は随分諸方を廻つて育ちました、七ツ位の時に父が最初の領事館附として里昂

へ参りました時、私も母と後から参り現今の本野外相なども御勉學中で日本の人は極少うございましたが、其時分の記憶はどうも判明してゐません、一番面白かつたのは矢張り明治女學校時代でした、大塚楠緒さん、小金井夫人、高山樗牛未亡人、若松しづ子さんなどで例の星野先生せいしんの柔術と薙刀なぎなたが盛んで私も熱心に稽古けいこいたしました。

「奥様は薙刀の試合に牛若丸など遊ばしてヒラリと體をかはされるとそれは、美しいお稚兒さんであつたと三宅様の奥様が御噂ごうわさでしたといふと、夫人は快活氣くわいけきに打ち笑はれて、

「ほんとにあの時分のお轉婆はよく佐々木にも笑はれます、何でもクリスマスか、卒業式の祝賀の時、それぐの試演しえんがあり、私は紫袴むらさきばかまに赤い着付きつけで牛若丸うしわかまるになつたやうに覚えてゐますが、それを皆さんが仰有るのでせう、佐々木も其時初めて見たあのお轉婆な小娘こむすめが慙こうして家へ来るやうになつたのかと思ふと不思議なものだなど、よく思出を語る時も御座ございます、」夫人は藤島家のお一人娘、花はづかしい十九の春に佐々木家より懇望こんぼうされて信綱博士の夫人となら

れたのである。夫人は自ら幸福な身の上といふ。

「私は佐々木へ嫁つても實母が一緒に居りますので吾まま一杯をいたし今日まで何の苦勞も知らず難有い身の上と存じ只子供達の完全に生長することを念じてゐます。

## 吉岡彌生女史

## 初旅の楽しい記憶

## 垢摺で顔を剥いたり

## 旅籠屋での失敗談

「私の生地、遠州掛川在の土方村は所謂酒屋へ三里豆腐屋へ二里といふ片田舎でしたけれど、父が醫者で兄達も其修業に東京に出てゐるところから、まア私なども其頃は女藝の他に色々な書物を見る位は能きました、當時東京の五大新聞が時事朝日、郵便報知、國民、東海など雑誌

では女鑑、女學雜誌といふやうなものでした。私はどうも何をしてても面白くなく物足りなさを感じてゐる中に、丁度十七歳の時、思ひ立つたのが、此醫學を修めやうといふ事なのでした。けれど親達は許しません、早く嫁にやらうとする。私は醫者になり度いと云ふ譯で夜中にコッソリ起きて行燈に着物をかけ物理や生理の書物を讀んでゐると父が見つけて直に行燈を吹き消したりしました、まア當時私は確かに親不孝の娘であつたに違ひありません。親娘は左様して二年間といふもの、睨み合の形で暮しましたが、遂に兄の申出で兎に角親類會議の結果、私は上京することになった。其時の嬉しさ、人々は旅出の朝を涙で見送つて呉れましたのが、私は不思議で堪らなかつた位でした、十九の春、田舎者の初東上は先づ掛川で家續きの町並に感心し、それから旅籠屋では手拭を持たず湯槽に飛込んだり。垢摺で顔の皮をむいたり、随分失敗談はありますが、上京すると、直ぐあの長谷川先生の濟生學舎へ入學しました、女生が十人程に男生が前期丈五百人も居る教室へ私が這入つて行くと「イヨー、小錦、ヨー、」と囃し立

てられたのには吃驚しましたが、兎に角一心になつて勉強しました一年間は夜の眼も合はさぬ程の甲斐あつてか、翌年には前期の試験免状を取つたので、さア國元では大騒ぎで新聞に出たり親達も全く變つた氣持ちになつたのでした、後期になると實地演習が始まり、解剖の折など数少ない女生は助手がなくて困つたり、繙帶巻にも今のように人體模型がないので、女生が裸體になることも能きず男生達は女の肩を持つてば恥であるかのような妙な心持であつたものと見えますが大學の田代先生等はよく慰り導いて下さつたので、今でも私は其當時の事を感謝してゐます、まアそんな自分の様々な經驗からも女醫學校は是非必要と存じて設立して今日に到つたのです。

## 文學博士の印象

大久保余丁町の電車停留場から、お稻荷様の鳥居を横に、また左へ折れてゆくと、静かな仕

舞ふた屋續きの通りに、一劃の、瀟洒な門構へのお邸があります。

まだ、記者になりたてといふ私は、其邸の門を這入つて、そつと、お玄關に案内を乞ひました。

静かに通された應接間は、お玄關から直ぐ左手にあつて、左様綺羅美やかに何も飾りつけてはないのですけれど、如何にも快けなお部屋で、折から、芽ぐんで來た柳の若葉が、其室の窓から形よく覗いてゐるのなども、何だか繪模様のように、凡べてあつさりとした感じがされました。

此邸の御主人公、文學博士の坪内さんは、その號を「逍遙」と稱はれる有名なお方、劇には殊に深い御研究をお積みなされたお方、御庭の中とやらに、抱月庵といふのがあつて、島村さんはその名を戴いて、抱月と稱けられたのとか、お子さんをお二人、士行さんにおくにごさんといふ方を（おくにさんはこれまた有名な新橋の名妓であつた、藝名ほんた。本名おゑつさんのお

娘) お貰ひなされて、御家の檜舞臺では、毎日のように藤間から師匠が来て、日本舞踊をお稽古さおなすつたようなお方、とか、また、眞に、流調な江戸辨といふのをつかひ得られる人は當代に於いて、新橋の清香と坪内博士とのみと、いつたような、何かの雑誌記事でも読んで居て、兎に角、天下の坪内博士は、たゞ譯もなしに、容姿かたちの瀟洒な上品なお方であろうと私は考へながら、暫時、其室にお待ちしてゐたのでした。

左様して、この、そよとの物音もきこえない、静かな御邸の奥にあの以前、藤娘やお七を踊られて、優雅艶麗極りなかつたおくにさん。現今はもう、或女學校を最優等で卒業された博士の令嬢くに子さん。と、如何にも溫和貞淑らしい夫人とは、今何をしてゐられるだろうか。なと、私は考へてゐました。

やがて、其室の扉が開かれました。私は眼を上げて其方を視、そして、静かに起ち上つて、初對面の挨拶をしました。

左様して、想像つてゐた坪内博士と、現に眼の前に現はれた坪内博士と、は、ちよつと、違ひました、顔色は蒼白くて、お若い時分の、肌の美しさは偲ばれましたけれど、もう白髪のお爺さんで、私の想像つてゐたような、美しい方ではありませんでした。併し、自然にその、氣品には打たれました。人間は矢張り、頭腦の中がその外型全體をも、支配して了ふものだとはその時つくづくと感じたところでした。

「何を尋ねにおいでよした？」と、博士は柔い調子でお訊ねになりました。私はちよつと、考へて、

「何でも、ちよつとお談を戴きたいと思ひまして……」

「さア、たゞ談と云つても困る。が、折角恁うして御いでよしたから、何か材料を上げませう。恁う云つて、博士は微笑まれました。で、私は丁度、思ひついて、博士が新作の脚本『名残の星月夜』のことを、ポツ／＼と伺ひました。それは丁度次號の中央公論に掲載されるものであ

つたので、まだ世間の人々は餘り知らないようでした。

「あの、時代は何時頃で？」

「私は何時もの筆方で、慙う訊きました。」

「名残の星月夜、といへば、もう鎌倉時代のことに限定つてゐるので……」

私は、ハツと心に思ひました。成程そんなことを訊かなければよかつた……。

「では、紙と鉛筆とをお出下さい」と、博士は云はれました。これは、もう、他の方どんな男の記者が行かれても、博士は、ていをは、の一字間違ひがあつても、氣になさる程、幾丁面な方とのことは伺つてゐたのでした。左様して私は筆記をしました。筆記の前に、私はまた如何様な難かしい言葉が出されるかと、内々危んでゐましたが、案外簡易なものでありました。

お談が済んで了ふと、博士は靜かに、私の上に就いてお尋ねでした。

「ハア、これから新聞記者をやるのですか。ええ？　ええ、娘は今、母と一緒に熱海に行つて

ゐますよ……。では、またおいで下さい。」

言葉数は尠くても、私は非常に温い親しみと、尊敬の心とを感じ、お後取りにと貰はれた士行さんがどうも其意の如く爲られなかつたとかいふ御噂にも私は何となくお氣の毒な念もされてこの博士のお邸を辭しました。歸りに、玄關まで見送られた博士の眼に、折からすれ違ふように這入つて來られました、島村民藏氏のすがたが見えられてか、元氣よけな博士のお聲が背後に残りました。

左に、その時の新聞記事を抜き書きして掲げました。

### ◇坪内博士新作の

### ◇……「名残の星月夜」

實朝を主題として―博士の談―



坪内博士脚本『名残の星月夜』を新作して近くこれを公にせんとす、源實朝を主題として尼將軍、公曉などを配せるなりといふ。博士語つて曰く

『私が實朝を主題にして劇を書かうと思ひ立つたのは『牧の方』を書いたと同時に今から約廿年前のことです、其際には牧の方と實朝と義時と、此三人を銘々主人公にした三段曲を、引き續けて書くつもりでした、併し何分にも學校の仕事や早稲田文學や其他中學だの何だのと幾つもの仕事を兼ねて居たので忙しく、到底實を入れ書けさうにもなく、又考へも色々に迷つて纏まりがつかず結局『牧の方』を書いた丈で中絶しました。

其後中學の仕事などが一層忙しくなつたので芝居を書くのを斷念し、又中學を止めてからは新舞踊劇を思ひ立つたり或は又據ない關係で文藝協會を引受けたり其他色々事があつて益脚本を書くことに遠ざかつて居ました。

ところが一昨年になつて、やつと大學を退いて多少の閑暇を得たので専ら自分の仕事に取り

かゝらうとしたのですが『通俗世界全史』といふ妙な仕事を依頼されてそれが爲めに又丁度一年程暇潰しをしました。幸それも昨年中に終つたので今年の三月初旬漸く筆を取り此作をつくりました、名づけて『名残の星月夜』といふのは第一期鎌倉幕府の末路を主題にしたからです、即ち尼將軍と實朝と公曉の關係を眼目にした悲劇です。

此腹案も前申した通り二十年前にもざつと立てたのですが、それは全で捨て、大正二年になつて又一度立て直しそれも殆ど全く捨て、此度の案にしました、御存じの如く實朝は日本史上の人物中で最も多くいろ／＼な疑問を下し得らるゝ人物です。私は其疑問的の人物と尼將軍との關係を解釋しようとして幾度も迷つたのでした、それが腹案の度々變つた所以です。一つは此二十年間に私自私の人生觀や藝術觀が大分變遷したがためであるのです』云々

## 難かしい夫と妻の撰び方

たゞ、ちよつと知人として交際つてゆくのなら、どんな人でも構ひません。

好人物だが一向信頼できない男、顔は美しいが少々頭腦の働きがほんやりしてゐる女、風采は立派だが薄情な男、しつかりしてゐて綺麗で申分ないが、變な病氣の血統がある家の娘なると云ふのは、たゞ、ちよつとお交際してゆく丈なら、一向構ひません。が、これが、一生を共に爲てゆかなければならない夫婦の縁組みとなると、一分別も二分別もつけてからでなくてはならないのですから、ほんとに夫を定めるのも、妻を撰ぶのも一生の大事事件なんです。それをちよいと其時の上せ切つた氣分のまゝに、前後の考慮もなく、もう世の中に、これより優れた人はないような氣持がして、結婚して了ふので、それこそ後になつて、急に、……家のヤツ

は談せないの、世間の女はみんな自分より幸福なように思はれたりして、女ならまア大抵、例のヒステリーで家の中に鬱ぎ込んでゐるか、でなければ額に八字の字でもこしらへて、絶へず不安な氣持がしたり、例のヤキモチとかいふのに、淺ましい女の醜體を曝露していゝ笑ひ者にされたりするのですね。又男ならば、厭だくと云ひながら、そんな妻と別れることもできないで、腕に働きのないところから、安價なところで、遂自墮落な眞似をして、男の器量をすつかり下けて了ふ。といつたような例はうよくとしてゐるぢやありませんか。

どうか、双方に慚んなことのないように、と、撰みに撰んでゐる中に、女は婚期を失つて、例の老嬢になつたりするものもありますが、男は、そこへ行くと、幾つになつたつて、構ひません。近頃の女は、男の若いなどを望みはしませんからね。少々位頭髮が薄くなつてゐても親父さんのような年恰好でも、氣樂に自分を暮させてくれる男が一番いゝ夫となるのです。それア若くて、その男に世襲財産でもあるのなら、結構ですけれど、併し、夫婦の年齢といふものは

男より女が一廻り位は、年下でなければいけません。凡べてそれで、丁度よくなるのです。

よく世間には、相互の感情がちよつと文合致してもそれで直ぐ結婚して丁ふ人もあるので、まるで若い男がお母さんのような細君を有つてるのもあれば、又孫の顔を見るようなお爺さんが、孫のような若い細君を有つてるものもあります。こんなのはよろしく、社會風教上からでも、打破して丁はなければいけません。結婚の條件としては、矢張り第一に年齢から考へてゆくのです。それから當人の氣質。これはどうも好き嫌ひといふものがあつて、丁度容態にだつて、良いと云ふ人と悪いといふ人と、みんな好み／＼に依るのですから、どんな人でも一樣にといふ譯にはゆきません。それから、生ひ立ちの良いか、悪いか、これも問題です。僻へばその家が貧窮してゐても、子どもの育て方に依つて矢張り氏のよい人といふようなところは現はれて来るもので、之はその母親の賢愚からして考へてみる必要があります。矢張り小間使に手が附いて出來た子どもとか、賤業婦などの群に生れた子どもといふものは、稀には優れて居

るのもあるようですがア大抵は、左様した血統が何處かに現れてゐて、矢張り録なことは爲ないようです。ですから、夫たるべき男も、妻たるべき女も、正しいお腹に生れて、賢い母親か、嚴しい監督者の手に教育された人に限ります。左様考へると、少々位、御面相が悪くても我慢しなければなりません。男は況して、腕さへあればいゝのです。女だつて、夫が立派に生活して、立派な奥様らしくつくらせて御らんない。女は一口に云ふ化け物ですから、いくらでも境遇に伴れて立派になりますよ。左様して常に精神修養を怠らないことが大事です。

資格といふものですか。さア近頃ではそんなものに重きを置く必要はありませんね。たゞ併し、なるべくなら正則に教育をうけて來た人がよいでせうね。餘り苦しい立場にばかり置かせられて來た人は、矢張り境遇に支配されがちなところから、何んでも自分さへよければ、他人なんか構はないと、云つたような道徳心のない、捻くれた、卑しいところがあつていけませんそれア、昔からまア、立志傳にでも名前が乗せられさうな人は、豪いには違ひないけれど、ど

うも暢然とした自然のままな性格が失はれてゐるようです。私は、自分が新聞社會へなど、飛び込んでみて、始めて左様思ひましたね。

子孫の爲に美田を残すな。などいふことをよく申しますが、矢張り残して置いてやる方が良いでしょう。それア、若しそれをうけ継ぐ子孫が愚者であれば困りますけれどね、愚者にならないように、よく教育するのです。僻へば、自家に財産がどつさり有るとしても、又自家が名譽ある家としても、何も子どもの時から、そんな歡念を有たせないようにさへしてゆけばよいので、家族の豪華な生活振りを見て、害になると思つたら、幼い時から寄宿舎へでも入れて、全く平民的な、簡易な生活に馴れるような方針を取つてやるのです。左様して男の子なら立派に一人前になつた時。生活といふものに些しの壓迫もない、寛大な悠然とした出發點からその位置なり、財産なりを益用して進んでゆけば、必らず立派な國民となることは能きます。私は、矢張り左様した例を男にも女にも、ちよいくと視てゐるからこそ、恁んなことも感じるのです。

まア恁んなことから私は、その氏も生ひ立ちも正しいと、いふことを望みますね。それから又夫になる男が、何を爲ようと、そんなことは構ひませんよ。文學士がいゝ、工學士は厭だなどいふのは下らないことです。たゞ多少、趣味——藝術を解したり、常に一般の思想界などに意を注いでゐる男で、はありたいと思ひます。そして、利口な男、ものゝ解つたといふことが肝心なところです。兎に角、如何いふ方面へ進んでゆく男でも構はないから、社會的生存力の充分ある男で、共に精神的方面にも向上してゆかれる男なら、女は飽く迄満足しなければなりません。

女への要求、妻への注文だつて、矢張り恁んな點から視て行つたらいゝだらうと思ひますね。ね。たゞ社會的生存力なんてことは、人の妻としては餘り必要がありません。その代り、女でなくては能きない、子どもを生むこと、人妻となつて子ども一人生み得ないのは、ちよつと

申譯がないでせう。罪は何れにあるか、兎に角、昔は三年にして子なきは去る。とか申して、たゞ優れた子孫を残したいばかりに、優れた女を撰んだ例も澤山あります。子どもを生んで子どもを立派に教育することが、満足にできれば、それでまア女は立派に一人前と稱へれるのです。併し、左様した心がけはあつても、子どもが生れないのは詮方がありませんから、他人の子どもを貰つて、しつかりと母親の任務を盡すのですね。無闇矢鱈と、粗製濫造とかいふ風に子どもばかり生んでも、親が立派に教育してやることもできないような、不用意な、無責任な親よりも、貰つてども育てようとする丈の覺悟のある妻の方が、どの位豪いかしれませんからね。

兎に角、女は一人の妻といふものは情が優しく、心がしつかりしてゐて動かすべからざる點もあつて、子どもを手頃に生んで、立派に育て上げられて……ええ。それで、美しかつたら尙結構ですね。まア、何れ、男も女も、努めて豪くなつたり、優れたものになつたりして置け

ば、自然に、骨を折らなくても、良縁が結ばれて、玉椿の末長く榮えること疑ひなしですから、お互の努力や修養こそ大切なところでありませう。

### 趣味講話 (秋の感じ二ツ) 私の好きな秋の歌

#### 三宅花圃

『和歌といふものは誰方でもその感じた儘を、三十一文字に詠みますので、その感動の力が薄ければ、自然にその歌も亦そのやうに現はれて來ます、先づ和歌のお稽古を遊ばす方で、一番詠み易いとお考へになるのは『月』と『花』とでございませう。

花は春、月は秋と言ひ慣らされたやうに自然に前者は賑やかに華やかで、後者は寂しい中に云ひしれぬ床しさが現はれて來ますのが通例であります。秋はその外水、山、落葉など歌題はさまざまありますが『月』の歌が昔からも多くあるやうです。その中でまア私の好きな一二首を

挙げますと『古今集』詠人知らず』の中に、

自雲に羽打ち交し飛ぶ鴈の

數さへ見ゆる秋の夜の月

と、申す如何にも澄み渡つた秋の月の光が浮ぶやうなのと

遠白く水影みえて山松の

梢はなるゝ秋の夜の月

等です。

後の歌は私の師故中島歌子刀自の作で『遠白く水影見えて……』即ち、まだ月が高く空に昇らぬ中に山の端から差す月光の美はしさを詠はれたもので、眞實に大好きなんでございます。一體此和歌は極く風雅なものですからその言葉などは矢張り古風に、なりける、かな位の文字は只今でも使ふ方が良く存じます。

井上通泰先生なども、此頃は頻りと、『其言葉は古く、意は新しく……』といふことを申されてるます、餘りに新しい詠ひ廻しは、やや下品に感ぜられるやうにも存じます、兎に角、只今ではだん／＼その題名などに捕はれずに、その意味を風雅な文字に充分に現はした方がよいと存じ、自宅などへ被入る方々にも、そんな心持ちでお教へ致してゐます。

さて、斯様にいろ／＼と批評は申しまして、私自身は一向詠みません方で、他人様のを添作すことには大變興味も、熱も有つてゐます、嘗て、故一葉女史なども、『契つて、詠まず、來ず』と私を評して笑ひ合つたことなどもございます程で、和歌を好みますこと丈は親譲りと申しても好いでせう、もと母が好みましたのに、父も亦多趣味の方でしたから、七歳位の頃から中島先生に自宅へお出でを願つたり、伺つたりしてお世話になつたのでございます。

## 「月光の曲」と「夕暮れの曲」

兼常文學士

秋の曲とか、月の曲とか云ふものは數限りもなくあります。併し誰でもその題名を聞き知つてゐる最も有名なのは彼のムーンライトのソナタであります。ムーンライトは作曲家ベートヴェムの殆んど代表的作曲とも言ふべきで、その曲は一度聴けば非常に感動される壯大なものであります。

併しこの曲は作家自身はそれほどの優れた曲とは思つてゐなかつたやうで、又、題目の「月光の曲」といふのも、作家自らつけた名前ではなく後で或他の作家が附けたものらしいのです。これはベートヴェンが若い時獨逸のヂェリエツト、ギツチャルデ井ーといふ伯爵の美しい令嬢に失戀した結果、人生には戀などよりも大切な仕事に幾らでもある。一婦人の事などはもう忘

れてしまはうといふ悲しい而して強いあきらめの心持ちを曲に織込んだものです。ですから曲その物に月光の胸に浮かぶやうな處はたゞ最初の一節だけで、これには水面に月の照返しがキラ／＼とする靜かな優しい氣分は浮かびますが、後はいづれも非常に壯烈な、そしてやゝ沈鬱な感動を人々に與へると思ひます。

その他に尙ベートヴェン自身も最も勝れた曲と思つてゐた曲で、またほんたうに秋らしい氣分の浮く同氏の作曲には、ソナタの七十二番があります、これも或伯爵の令嬢テレザといふ娘に失戀した心持ちを唱つたのですが、ベートヴェンは元ボン市のヴァオリストの子に生れ、代々その家は音楽家であるといふ以外には何の身分もなかつたので、多くの貴族の人との戀は毎時も失戀に終つたので、一生を獨身で只だ専心作曲に耽つてゐるといふことは畫家が盲目であるも同然で、この點から考へても彼は實に偉いと思ひます。

其他、最も日本人などに『月』とか『秋の夜』とか、いふ感じを與へる曲では、シヨパンの

ノクチュルヌ（夕暮の曲）といふのがあります。これはムーンライトなどより、ずっと閑寂な  
 優美な曲で、實にそのメロディの一節（）が進むにつれて、楚々哀々とした、云ひしれぬ悲し  
 さの快感とでもいふ情の動く曲で、即ちムーンライトの壯烈男性的なるに對して、極く靜寂な  
 曲だと思ひます、彼のサレスカ夫人が青年會館で達若に彈奏されたこともありすが、私な  
 どは秋が來ると一層深くこの夕暮の曲を偲んで、何とも云へぬ氣持ちに打たれるのであります。

## 樂屋見たまゝ

舞臺は、今、太郎冠者氏作の『呪』の一幕が濟んだばかり。お食事時間の休憩に、永井樂長指  
 揮の下に、輕やかな管弦樂の音が、遙かに舞臺裏を越して、きこえて來ます。

帝劇の樂屋、女優の部屋は一番高い三階になつてゐて、そこに二十人余りの女優たちは、各

自に美しい鏡臺を控へて整列されてゐます。……レイト白粉、平尾贊平……と銘打つた黒塗り  
 の大姿見兼鏡臺は、これは、兩端に陣取つて、よろしく此一連の幹部といつた格の、森律子に  
 初瀬浪子、片々が村田嘉久子に、河村菊江の四名に丈、レイト白粉からの寄贈と察せられまし  
 た。

『ね……、早苗ちゃん。ちよいと、此處へいらつしやいな。貴女によく似た人が來ましたよ。』  
 『呪』劇の女主人公、何とやらのお姫様に扮して、難かしいお役を無事に濟ました律子さんは  
 もう樂屋へかへつて、ホット一息吐いたところの、何もかも碎けた調子で、恚うちよつと、坐  
 つたまゝで背伸びをして、彼方に云ひかけました。

早苗ちゃんは、まだ、出の舞臺には間がある、といつた風に、派手な浴衣の上に荒い縞の羽  
 織を引かけて、何か人情本らしきものに、一生懸命で讀み耽つてゐましたが、恚う、云ひかけ  
 られて、ちよつと此方を視、左様して可愛らしい丸顔に、につこりと微笑んでみせたばかりで、



復た一生懸命に、それに読み耽つて了ふ。

その日は、律子さんの『弟の會』といふので、緋薔薇や白百合、うす紫のすみれを並べてみたような恰好のお嬢さんたちが、この幕間をせめてもの、あの強い力の持主であつた、併し戀には破れて煩絶したお姫様の、律子さんに逢つて、何やかや云つてもみたい、といった可愛らしい若い感情の人々が、ズラリと、その鏡臺から壁の方に、卵形に並んで、たゞ嬉しさにキヤツ／＼とさわいでゐるのでした。

『ほんとうに、私ゾツとしちやつたわ。あのあなたが、疳高い聲に、御自分の權威の度を示された時の……』

『あゝ、私もよ。何て嬉しかつたでせう！』

律子さん崇拜の『弟の會』の御連中はもう心から嬉しさに讚歎の聲を向ける。

『左様して又、あの表情つてなかつたわね。此處るところへ、慙う深い皺を寄せてね……』

『あら、厭ですわ。そんなところまでお賞め下さつちや……多分それは地でせうよ』

と、云つて、如才ない律子さんは、ちよつと、私の方へ眼を向ける。若い人々は、また嬉しさにキヤツ／＼と笑ふ。遂此方まで笑はずにはゐられないような其處の氣分です。

『今日はお一人でござんすか？』

直ぐお隣の鏡臺に、今迄一心に、顔を刷いてゐた浪子さんは、慙う、不意に言葉をかける。『えゝ。一人です、』

『それアお寂しふござんすね』と、此の優の調子は、その容姿形のように、何方までも意氣といふ文字が取れないのです。浪子さんはこれから『金吾秀秋』の側女とかに出なければならな

いといふ……さつさと衣裳づけに取りかゝる。

代つて、彼方の嘉久子さんの方へお伺ひしようと、私は立ち上つてゆく、樂屋の真中どころに、鈴木ふく子さんに櫻井八重子さん、嘉久子さんの妹の美彌子さんとが、何れも鬢下地に、

顔丈は拭ひてとつたといふような、襟白粉のコツテリしたところを見せて、きゆつと緒締めをしたり、ボン／＼と鳴らしてみたりして、今度出る幕の、鼓のお稽古をしてゐる。

鈴木ふく子さんといふ優、舞臺で見る時よりは、すつと可愛氣な、左様して利口さうな感じのする點が、何だかちよつた以前の衣川孔雀さんにも似てゐられる。

美彌子さんはふつくりとして、美しい顔立は、よく姉さんによく似てゐる。

八重子さん。これは例の青柳有美先生で、大分有名になつた優、和歌も詠めば繪も巧く描く。余り何事にも小器用なのが、或は此の優を、一生帝劇の腰元役で終らせて了ふのかもしれない。などゝ考へ乍ら、菊江さんの鏡臺の前から、嘉久子さんの方へ行つてみました。

『おや、おいで遊ばせ。』と、丁寧な、しとやかな御挨拶。律子さんのお如才のない……それとは又違つた味のある此の優の應對ぶり。が、この頃は神經衰弱やら神經痛やらの氣味で、どうも工合がよろしくないとのこと。併し、今ざつと一風呂浴びて來られたばかりの、ふつくりとし

たお顔の光澤／＼しさは、何時も美しくて、變りもない。黒襦子の襟のかゝつた荒い大島に、絞り浴衣を重ねた樂屋着のすがたは、何となくおいえはん。とでも云つてみたいよな、此の優の顔によくうつてゐる。

『いかゞです？ 此度のお役は？』嘉久子さんのお役は律子さんのお姫様に對して戀の勝利者の侍女で呪ひ殺される憐れなお役。

『さア、少々やり難うございますね。何しろ、臺詞も動きも尠くてゐて、さまざまな表情を現はさなければなりませんので……、それに何ですか手や足の節々が痛んだり、肌にあざみたよな痕が出たりして、ほんのあれ丈の出でも、随分疲れますのですよ。』

『左様でせうね。拜見してゐてもちよつと肩が凝りさうですよ……。そんなにあざが？では、あの黒人だちに、もつと、そうと腕をとつてお貰ひなさいな。……ホ、ッ、左様も出來ませんか……。けれど、あなたのお聲が一番いゝ響きが、舞臺から見物席へ流れますよ。何時でも、

私はあなたのその聲量を、畑ちがひの私でさへほんとお羨しいと思つてゐますよ。』

『あら、左様でせうか。でも私はほんとに苦しいんでございますよ。それですからもう始終、咽喉を大事にしております。……』『ごさいまして』……といつたような場合に、その……して』までが判然、御客様の方へきこるるか如何かと、心配なんでございますが……きこえまして？』

嘉久子さんは、眞實に、藝風の落ちついて、云ひしれぬ優しみのある通り、の嘉久子さんです、律子さんが飽く迄、花形といつた如才ない應對ぶり。又その通りの舞臺であるように、浪子さんは浪子さんで側女とか、新造とか太夫とかいつたような艶かしさを有つてゐられるのは、矢張りその優の性格から舞臺の藝風も、自然に形づくられて了ふのではなからうかとも思はれました。

何時か、舞臺の方は、森として、勘彌の妙技か、幸四郎の重味のある藝風かに、観客たちは納まりかへつてゐるようでした。私は、此處で此の日は、お目に懸らなかつた菊江さんの、これは清楚極まる舞臺のすがた、お聲にでも接しようとして、急いで、みなさんにお暇を告げて、復たうす暗い舞臺裏から、再び二階の席の方へ……。

## 夏すがた

『また、爽やかな夏がやつて來ましたね。今年は何處へ御旅行ですの？』

『今年？ さア海にしませうか、山に行きませうか。まだ考へてありませんの。』

『まア、もう、そんなこと云つてらつしやる中に、夏が過ぎて了ひますわ。ね……山の方になさいましょ。山のお湯へ……。又あの赤倉へでもお出でなさいました。箱根や鹽原、左様いふところは夏場は、人ばかり混み立て、おちくとした氣持ちにもなれやしませんもの。あれぢや折角、騒々しい塵の巷をはなれて避暑に出かけた、甲斐がないぢやありませんか。』

『左様ですね。けれど、近頃はそんな眞實に靜養しようなんて氣持ちでなく、まア何處かへ行

つて、お金でも撒いて来ようつて、たゞふいとした心持ちで出かける人も、随分多くなつたんですね。ですから、いけないのです。そんな人達に逢つちや、折角美はしく飾られてある自然の恩典、山や川や、雲のたゞすまひ、水の囁き、青葉を渡る風の訪れだつて、一向賞美されもしなければ、根つから感じられもしないことでせうね。なんてまア無風流な人達なんぞでせう。

『えゝゝ、近頃はそんな風流なんか流行らないんでせうよ。たゞ見榮に旅行して歩くようなものね。いゝ着物をきて、わざゝ暑い念をしてゝもね。ほんとに妙なことが流行つて来るようですね。』

『あゝ、流行といへば、着物類では今度の流行はどんなのが流行といふのでせう？』

『まア、今時分そんなお尋ねはもう遅うございますよ。ですから今年の流行といふよりも私の好きな夏のすがたをちよつと申上げませうかね。』

『ハア、どうぞ……今年は大變羽織を着るのが流行のようですね。』

『えゝ、サンマーコートが廢れて、その代りに單羽織が大變出ましたね。ですが、あんなものを無理に引かけなくも、いゝぢやありませんか。暑い時にね。何もお坊さんの法衣ぢやあるまゝ、下から着物や帯を抜かして暑い思ひをして、まアお金がかゝつてゐるといふところを見せて歩くのですね。一體夏によそほひといふものは、左様いろゝなもの、冬仕度のように重ねて見せなくても、着物と帯、それに襦袢にバチンや洋傘、履物などの附屬品位で可なり賑かになつて了ふのですからその上に單羽織なんぞ着るのはまア贅成されませぬ。さアそこで流行を追つてみて一番見榮えのする年恰好といへば、矢張り二十六七の若奥様向きといふところですね。先づ、頭髮を涼しやかな根の高い丸髷に結つて、淡い肉色のでがらに、これも淡い色の翡翠の根がけ、白鼈甲の透し刻りの櫛をさして、おくれ毛が一条亂れてゐてもいけません。夏の頭髮かたちは、凡て日本髪なら一条亂れぬ櫛の齒の通つたところを見せるか。又さばさばとした肌ざわり快さゝうな洗髪の輕やかな束ね髪にするかで、見るからに胸の透くような涼しげ

な氣持ちを人に與へてほしいものですね。着物は、極暑は紗縹の無線ほかに、下からあつさり紅入り模様、長襟袴を透かせたのなどもいゝでせうが、まア婦人向としては紋金紗縹縮緬に、全體に飛んだ細い模様と、殊に裾といはず、肩や腰の下方、袖などに、花や蝶などの染め出された、暑苦しくない迄の濃い地色のものが、日本人の肌にはよく榮えるようです。それで帯は矢張り水色の縹縹珍、やさしい草花の浮き模様、でなくは白地の極上羽二重に精巧な刺繡をして、細目な丸帯を、きゆつと締めているのもよいものです。それに、バチンは氣の利いたもの、夏は着物が少いのですから、お金をかけようとあらば、バチンか、指輪とか頭髮のものにいくらでも金目を見せられるので、わざ／＼ゴテついたおつくりをするには及びませんよ。洋傘は矢張り涼しさうなレース入りのもの、履物は極上の南部表に黒と藤色の二筋緒などのついたゴム裏草履がいゝでせう。草履にまで縹珍、お召を使つたのは、私は好きませんが、恁んなおつくりをした婦人はまア自動車で海邊でも走つてから、氣の利いた洋館のバルコニーで

西洋草本の匂ひでも嗅ぎながら、暮れてゆく濱のけしきを眺めてゐる。といったような背景に適しいのですね。

それから又この背影が、川の邊りか何かで、細い雨がしよほ／＼降つてゐるといつたやうな時。そのこの橋の袂にすらりと立つた女のすがたは、抜けるやうな白い頸に、銀杏返しの鬢のほつれが、これは一筋二筋亂れかゝつたのが、又一際の風情。但し、奴元結切つて放つたつづし島田でも結構です、着物は元より素肌ですから、縦縹や紋紗は御不用。矢張り古くても何でも縮緬浴衣といふところですね。縮緬は絞の大きいゴリ／＼したのを水色の配色で絞り模様にするのです。定紋くづしでも絞つて、古歌のはしか、自分の名前など細い文字で染め出してもよいでせう。しつとりした、その浴衣を左の手で、ちよつと袂取つた時。ハラリと亂れた禪は是非水色であつと欲しいのです。白い脛に水色と紺との揃る肌ざわりも快く、泥濘を拾つてゆく履物は黒の低い木履なら足の色、足のかたちを一層やさしく見せませう。傘は細手な、紺色

に白い濡燕でも飛んでいたらよいでせう。帯？ あゝ帯ですか、帯は矢張り、白献上か茶献上の元より細いのを、きゆつと、吉彌か何ぞに結ぶんです。お化粧？ お化粧はしてゐない元より素顔。慙うした風の女が白粉をコツテリ塗りたてゝ居るのはほんとに厭なものです。況して夏は、誰人でも素顔が。まア、お上品向きなところでも、あつさりとして薄化粧に限りますね。柳のかけから、ちよいと傘を傾けた、彼方の離座敷の二階を窺つた時。思はずニツと微笑まれたその女の顔は丸くて長い、形のよい鼻と、黒い濕ひを有つた脛、紅い薔薇のうな口元とは、色澤くしい白い面に、雨の中で一層滴るような鮮かさを浮ばせる。年の頃は矢張り二十六か七。これから戀も情も苦勞も深みに入らうとするところですね。

併し、慙んな社會の女は、たゞその外形がよいといふ丈。その心理に到つては、到底お話にはなりません。』

『さア、あなたのお好きな夏すがたといふのは、これ丈ですか？』

『左様ですね。まだないこともないのですけれど、まア、この位でよしませう。もう慙んな下らないこと、辯舌る方も疲れましたよ。』

## 職業 婦人

### 男の生徒に英語教授

詩人透谷未亡人北村美那子女史

男子の學生を婦人の教師が教へるといふことに於ては我國最初と稱せられて居る池袋の豊島師範學校に教職を奉じてから、もう十一年夫君透谷氏に先立たれてから早くも廿六年を経過する今日まで其纖弱な婦人の手一つで、奮闘努力を續けて居る北村透谷氏未亡人美那子女史は牛込新小川町の自宅に實用英語學校の看板を掲げて、師範學校勤務の餘暇にも猶倦むことなく仔

々として人の子を教へられるのです。

『……青木の細君は笑ふと齒並の美しいのが眼立つて……』と藤村氏が彼の「春」の中に書かれたやうに、美那子さんは自づと其の理智や生きる力に富んだ凛々しい御顔に笑はれる時白い美しい齒並が何處となく人を魅せしめ其の應對振りは流石に語學の達者なそして深い造詣を偲はする明快な調子で、すべてがテキハキされてゐます。昨日お宅を訪ねますと

『もう私の思出も餘り繰り返しますと、古いといった感じが致しますね、唯夫があうした様々な悩みを抱いて亡くなつてから私は米國に参りオハイオ州のデハヤンス大學に學んで、歸朝後娘と（英子さん）實母と、（故石坂昌孝氏の夫人）で家を持ちまして他處さんのお子様方をお預りしたり學校の餘暇に宅へ入らつしやる方々をお教へして來たといふ迄のことですもの、併し苦勞はなかく絶えませんが、今も娘が病氣なのですから、孫共を此方へ招んで看護から一切の面倒を見てゐますので……』

と憂はし氣に語られました。此の健氣な未亡人が唯一つのお張合ともなつてゐる御一人娘で現在堀越氏夫人の英子さんは流行感冒のため病床に臥つてゐられるとのことで、美那子さんのお心中さこそと誠にお氣の毒に存じました。

### 我國最初の看護婦

大關チカ子女史

昨年秋には栃木縣在の其の祖先へ贈位の恩典があり、又此自身には還曆の祝賀をすまされて頭には早や霜を頂き御年榮ながら、今尚飯田町の看護婦會事務所に在つて晝夜の別なく活動を續けてゐる大關チカ子さんが今日迄の生涯には、職業上の苦心談や成功談や清いロマンズや數ふれば其の紆餘曲折の事々、なかく筆には盡されない位でありませう、チカ子さんは何時もお元氣のよいお話振りで

「私が看護婦になつた動機？ 實を云へば最初は看護婦なんて全く嫌だと思ひましたよ、けれど私は植村正久先生の許にお世話になつて、信仰の餘暇には先生からナイチンゲールの話杯を伺ひ、又時の世論が婦人の職業としては此上もない獻身的の慈善事業として激賞するといふ釋で、とう／＼私も全くの無學文盲なのでした。先づ矢鳥さんの女子學院に入つて勉強することになつたのでした。それから後大學病院の方へ參りましたが何しろ看護婦としてはこれが我國最初の者だと云ふので、なか／＼辛い苦みもありました、其頃の仲間には鈴木、櫻川などといふ人々がありますが、もうお互に忙しいので往來もしなくなりました。大學の看護婦も其後だん／＼殖えて私は暫時婦長の職に就き後また越後高田の知命堂病院に七年間奉職して廿九年歸京し東京看護婦講習所の講師となりました私が獨立したのは三十二年十一月、神田猿樂町に大關看護婦會を設立して此處では九期迄の生徒都合百人ばかりの看護婦を養成した譯です。が大正五年一月發布された警視廳の看護婦令に依つて、此職

業に入る者も現在各病院などの免許を得て獨立し得る婦人連もまア其希望や處世の道を失ふやうな傾向となり従つて近頃看護婦拂底などの聲なき様になつたのだらうと存じます。兎に角私としては此看護婦の方は補職で永い間の信仰殊にも此頃はたゞ傳道のたのしみを感じて日を送つてゐます。

## 刺繡の奥妙を究む

菅原氏に師事した織田女史

小石川雜司ヶ谷永樂病院下に此頃菅原刺繡研究所支部と優しく女文字で書いた看板が掲げられました。之は宮内省の御用を蒙る刺繡の大家菅原直之助先生に就いて六年の久しき、斯道の妙奥を研磨して、あつばれの腕前となり、菅原先生唯一の女弟子と云はれる織田安子女史（三八）のお家で、今や安子さんの妙技は知る人ぞ知る。諸方に傳はつて遠く京都あたりからも、刺繡



を頼みに寄越される婦人もあるさうです。安子さんは訪問の記者に語らるゝやう。  
私は女子職業で一通りの刺繡の稽古をいたしましたのが此の道へいらしむに至つた初めで、生涯を刺繡の研鑽に献けんものと、女弟子を取らないと仰しやる菅原先生に無理にお願いして、六年間先生のお家に置いて戴いて、どうやら一人前になつたやうな次第ですが、まだこれから尙進んで研究せねばならぬと思つてゐます。刺繡の奥儀は何誰が御覽になつても、いつまでも飽きの来ない様に作つたものでないといけません、それですから下書で見た時よりも刺繡にしたら、浮き上つて活々して来るやうになるまでには、中々一通りの苦心ではありません、菅原先生のお作りになつた慈母觀音の像の刺繡は只今國寶として美術學校に保管して御座いますさうですが、さういふ傑作は容易の事で出来るものではありません、下繪に刺繡して色彩を出しますが其糸は菅原先生が苦心して染められるものを用ゐてゐます。刺繡の色の出し工合は中々に困難であります。』

と、安子さんは漸く出来上つたばかりの黒縞子の帯に刺繡した孔雀の羽毛を見せられました。其の形といひ、色といひ實に美事な出来で、それを作るに一週間位は熱心に仕事をせねばならぬとのことでした『仕事にばかりかまけてゐますので服装などはかまつてはゐられません』と、まだお若い安子さんは恥かしさうでした。

### 茶道と生花の教授

趣味に生活する堀部夏子女史

小石川駒井坂の中ごろ、目白僧園のお近くに、『有樂庵』てふ軒燈を掲げて、潜り戸の瀟洒な構へは茶道と生花の教授を以つて立たれる堀部夏子女史のお住居でございます。月曜日と金曜日とがその自宅教授の日で、某伯爵家の令嬢や良家の若奥様などお行儀正しいお茶の湯のお稽古が階下のお部屋に開かれ、二階八疊のお座敷にはパチン／＼と木挾みの音がして早咲の白蓮

や臘梅が花筵の上に展けられ床の間には挿花に懸花などとりくぐりに自然に逆らはぬ風雅の趣味が床しい花の香と共に漲つてゐます。夏子女史は今お稽古中のお茶室の一隅にキチンと座はられて、美しい御弟子さんが紅い帛紗さばきの御手前を覽ながらのお談。

『私は矢張り小さい時から自然に斯様な事が好きだつたのだらうと存じます。岐阜に一人の叔母がありまして、その家へ私は養女として参りましたが、その叔父が此の千家裏の有樂庵と申す家元だつたので私が其の家元を継ぎましたのです。此の有樂庵といふのは織田信長から出た流儀で、東京には他には御座いせんやうです。何しろ茶道の方にも流儀といふものが段々に増して随分複雑になつてゐますが、表よりは裏の方がやさしく丸くといふ様に取り扱はれてゐるやうに思はれます。御花の方は京都で長く池の坊の家元に學びました、明治卅三年に上京して跡見女學校等で御教へ致してをりましたが只今ではお邸などへ廻りますのが忙しいので廢めました、池の坊は一番自然に適うた趣味がございしますが他流も皆一通りは研究致しました。又挿

花なども一寸客人を待たせずに生けて差上げるなどの折には最も氣の利いたよいものと存じます。

## 二十餘年間の苦闘

長唄舞踊の師匠鹿島惠津子さん

『……日曜の午前丈は大低御休みに致して居りますけれど、なか／＼皆さんの御都合で左様は参りません、此の職業も元は私の樂しみから始めましたのですから教へるのにも左程骨は折れませんけれど、たゞ私共が藝を仕込まれた時代と違ひ、此頃はお子さん方に強い事を云つて厳しく教へるなどといふことが出来ない一體のやり方になつて居るので、随分お子さんの性に依つては此方から氣を練つてかゝらなければなりません……』

磨き抜いた長火鉢の前で、香ばしいお出花を手輕るに入れて進めながら記者に語られますの

は現在本郷四丁目長唄舞踊の師匠として立つて居られる鹿島惠津子さん。今から二十年餘り前には帝都に嬌名を謠はれ其の全盛を誇つた新橋の『ほんた』で夫清兵衛氏と、同棲してから既に二十五年間もう來年は芽出度き銀婚式を挙げられるため、今は其の準備に忙しいといふ短からぬ歲月を唯一筋に夫に付きながら多勢の子供を教へて奮闘し續けた惠津子さんこそ、職業婦人としても亦模範とするに足りませう。長火鉢の側にはもう白髪も混つていたく老けられた清兵衛氏が惠津子さんと交るゝの思出話、記者は談を轉じて坪内くに子さんの近況を御伺ひすると、

『……只今は矢張熱海ですが廿日過ぎには歸つて來ませう。あの娘は七ツ迄手元に置きましてそれから先生の方へお預け申し、そしてあんなに幸福者になりました譯でございませうが、踊は此方では少しも仕込まれず、先生の方でさせて戴きましたのですが其れも文藝協會の散會と共に踊の方は、ピタリ止めました、もう、ちよいくと私共を案じては訪ねてくれますので此方でも何時も待ちかねて居ります。』

## 電話創設の時から

世餘年間勤續の井上とみ子女史

目下婦人の職業として最も其多數を占め又漸次其向上をも計られんとする電話交換手幾千名の中に第一人者として知らるゝ井上とみ子さんは、實に電話局創設の明治二十九年の最初から今日に至る二十二年の永い間、雨の朝、風の夕べ、曾て一日の倦むこともなく只一筋に其職に奉仕して今日の地位を堅められた人であり、トミ子さんは現今蠟殼町の養成課分局に在つて多くの交換手を養成の任に當つてゐられますがその忙しい時間を割いて應對される容子は誠に禮儀に厚く真心から出づる温かさを感ずる人です。

『……いゝえ私なんぞほんとお恥かしいございませう十八の時不圖友達に勧められて此職に就

きましたのですが、何に致せ忙しい仕事で、他にいろ／＼考へてゐる餘裕もないやうな身上でございませぬ故か、遂／＼こんなにも永く致すことになりましたのです、左様でございませぬまあ婦人の職業としては、極く適當した總ての點からみて誠によろしき職業と存じます。そして此頃は『だん／＼素養のある方が入つて來られまして結構な事と喜んでゐます、今までに一番嬉しかつた事？ それはやはり明治四十五年五月畏れ多いことですが天皇陛下（皇太子殿下に在せし頃）が行幸あそばしました折で、熱心に御閱覽遊ばして下さいましたのも、誠に有難く存じました。苦しかつた事、それは餘り御座いませぬね、一年中で唯入梅の頃はもう仕事に骨が折れて苦心した事もあります、まあ自分幸福を感じてやつて居ります仕事ですから悲しいとか苦しいとかの思出は一切ございませぬ……』

と、トミ子さんは飽く迄職務の上に希望と光明とを忘れぬ方でした。

## 四十餘年の下宿經營

加藤くめ刀自

血腥い風、氣味の悪い響き、血まみれの武士が拔身の長刃を提げて、街の人々を脅して歩いた明治十年、俄に夫に死に別れた悲歎の念を一番奮ひ興して、自ら青山北町の萬年屋といふ旅人下宿業を開始した加藤おくめさんは、八十三歳の今日まで全くの獨り立ちで四十餘年間倦うした身も心も忙しない職業に従事して來られたのでした、をくめさんは稍薄暗いお帳場で、實子のおツネさんを相手にボツ／＼と其の思ひ出話をなさいませぬ。

『……いえ、もう私なんぞ、何もこれといふ變つた仕事をした譯では無いのですよ、唯夫に死なれて何も致すことが無いので、始めた此の商賣、幸か不幸か一人になつてから始めて世間といふものが判つて參つたやうなことですから商賣の方も私などは最初から派手に大きくと

申すよりはたゞ堅く正直にやるといふことに注意して、仕入れ物でも客扱ひでも僞らず飾らずにやつて来たのです。さうですね、此業を此處で始めた時分には農科大學の出来た時で、今の農學博士の原さん其他、駒場の先生方は多く私の處に下宿しておいでになりました、原さんなどは其時分まアお仲間でも亂暴者でなく、大食家で、私など折々お櫃を抱へて逃げ出したなどの滑稽もございましたが、それ丈け皆さんも打ち解けて下すつて、あんなに立派におなりなすつても皆様がよく御親切に御訪ね下さつたのです、私から云ふと我田に水ですが、此の旅人宿や下宿等といふ商賣は極く女には適はしいもので、左程骨の折れる職業でもなく、唯何事も正直に堅くさへやつてゐれば失敗丈は致しません、ですから私は此娘にもどうか私の後は矢張り其心持ちでやる様にと申してゐます……』

とおツネさんも亦全く獨身でお母さんの志を繼がうとしてゐられるさうです。

## 自活婦人の爲めに

## 東京女子割烹學校の指原乙子女史

市ヶ谷見附の電車停留場から小半町の本村町も方へ行くと、一際眼につくのは、東京女子割烹學校の校札です、これは、多年割烹研究家として著名であつた指原乙子女史が獨力經營の學校で、建物は女史が新工夫にて普通の住宅を輕便に改築したもので、教授科目はお料理の外に嘉悦さんや吉岡さん磯野氏などが何れも料理に關聯しての講義や實習など他には見られない教授振りを發揮されてゐます、乙子さんは何時もガツシリとした元氣の好い調子で

『私も夫に別れてから十七年の今日迄自ら職業を探がして歩いたといふこともなく斯うして行つてゆかれるのは全く皆さんの援助に依ること、私は常に其の幸福を感謝してゐる次第です夫安三（漢學者にして開成中學の創立者）が逝くなりましてから直ぐ三輪田さんの御勧め

で女子美術學校に十年、其れから帝國割烹講習會の方に七年間勤務して昨年始めて此の學校を創立致したのです、只今は何と申しても氣樂でございませうが、それでも一週に一度づゝは駒澤の演藝學校にお料理を教へに參らねばなりませんので相變らず多忙は免れません、演藝學校の方は男の生徒さん達に教へるので、なか／＼滑稽な事が多く、最初は如何してものになるかと案じた位ですが段々進めてゆくと矢張り男子は男子だけに、其前途は非常に有望で婦人の遠く及ばぬ技術を有つて居て婦人達の學ばねばならぬ點が多いやうです、それから若い婦人方には一體に我儘と飽きつほいのとが何事にも邪魔をする様です、夫もまア幸福續きで暮されれば結構ですが一旦自活しなければならぬといふ場合に立至つた時、決して他人に依らない丈にやり得るやう、皆さんにも斯様した心持ちですべてお教へしてゐるのです。

## 健實なる聲樂家

## 第一高女に十五年鈴木の子女史

才媛を多く出すといふ評判の府立第一高等女學校に十五年も勤續されてゐる聲樂家の鈴木の子女史は、音樂學校聲樂科第三回目の卒業生で、青葉の茂る上野の山をサバ／＼とした洗ひ髪に、薄色の袴を裾長く引いて學校へ通はれた其往時のお姿は現今もお變りなく、身も心も共に若々しい温かい感じを何時も人に與へるお方です。

『私のやうな者にお話し申上げる材料なんてあるのですか……唯もう、長い間やつて來たといふより他に何も能がございませぬのです、母校の音樂學校に聲樂科が出來て、第一回に卒業された戸倉さんは、今學習院にゐらつしやいます、第二回には彼の三浦環さんが出られ、私は其の第三回目でございませうが、此の聲樂が今日のやうに隆んになつたのも全くマダム・ベ

ツオードの御力が然らしめたものと私共は常に聲樂界の爲めに大に感謝を拂つて居る次第です、音樂は最も天才を要することですが、殊に聲樂に至つては餘程の天分がないと進まないもので、元來私などの迎へべき道では無いのです。私は唯ボンヤリと、西洋の名ある方のことを伺つてツイ自分も始めたくなり、慥んなになり、長く續けては居ますけれど、もともと私體も弱く、天分も薄く何故もつと他の道を選ばなかつたかと思ふやうなこともありますよ併し皆さんをお教へする事は今日迄苦痛とも存じて居ません、矢張り好きなのですから……聲量は私共の一番大切なものですから風邪など引かぬやうに、又演奏會でもある前には餘り大食や刺激物を頂かないやうに睡眠時間を多く攝るやうに心掛けて居ります』

と、のぶ子さんは聲樂家らしい美しいお聲にニコ／＼とした。やさしい調子でお談し下さいました。

## 苦學力行で女醫に

マツサージの權威藤井かう子女史

目下本郷彌生町二に住居を置いて午前は其處に宅診し、午後は各名流夫人方への往診。又月曜金曜の午後には赤坂の婦人矯風會に於て一般の外來患者に懇切な治療を施してゐられる女醫の藤井かう子さんは人も知る通り、全くの苦學力行にて今日の成功を収めた方でありませう、かう子さんは月曜の午後矯風會で患者の診察を終つた許りの忙しい間にも、テキパキとした思ひ出話の数々や又此のマツサージを弘める御自身の意嚮に就て斯く御話なさいました。

『私が自身で慥う申しましては如何かと存じますが、私が醫學を修めて今日どうにか慥うにか行つて參られるやうになりましたのは、私の母が疾く女子教育といふことに意を用ゐて居りましたのと。又夫(法學士)がよく私の希望や意志を尊重して自由を與へて呉れましたのに依

るものと思つて居ます苦學といふ程でもありませんが最初巖本先生の明治女學校に入學した時學資が不自由になつた爲め一旦歸郷致し、それから再び上京して、或舊師の紹介で矢島先生にお目に懸りまして、女子學院へ和文と裁縫の教師を致しながら英語の勉強を始めました。が、五年間といふ永い間を單に英語のみではと夜中に起きて醫學を研究し、其間もマアいろく々に苦心して大正五年迄に開業試験を取りましたのです。で、私が此のマッサージの研究を始めましたのはつまり一般家庭の主婦連にもつと衛生的な知識を普及して、自分の身體の内臓や又其家族等の身體をも解して、不健康な者を出さぬやうにする事は、人々の能率増進の上からも大切な事なので、マッサージは先づ左様した方針を持つて主として婦人の方々に弘くお勧め申してゐます。

## 畫題に支那婦人を

好んで描かれる栗原玉葉女史

小石川指ヶ谷町の電車停留場から御殿町の方へ二三丁入つて右へ折れた通りに小じんまりした一構へは栗原玉葉女史のお住居であります、すべりのよい潜戸をぬける、春はまづ紅梅の床しい香が訪ぬる人の心を柔け、秋はお玄關迄萩や女郎花が咲き亂れた風情が、如何にも風雅な人の住居とこそは惚ばれます。此家の女主人公の玉葉女史はまた靜かなお居屋の中に大低は畫筆を執つて暮されてゐます、東都の閨秀畫壇は先に池田輝方畫伯夫人百合子さん(故蕉園女史)を失ひ川崎蘭香女史去られまして今は全く此の栗原玉葉女史が一人其權威を占て居られます、玉葉さんは故寺崎廣業畫伯の門弟でゐられた丈に其畫にまたよく其師の流れを汲んで、日本古代の歴史から其構圖を得られたり人情風俗の機微を見事に畫き出されるのがお得手であります



そして玉葉さんは其人格も清く口重な婦人で、何時もニコノと温かい笑顔を見せられますがお談振りはボツ／＼と氣乗らぬ調子です。

私はもと先生の御話などでそんな趣味が生まれ出ましたのが兎に角日本人と西洋人と、支那人との中で最も支那の婦人が畫趣に富んだ點のあるやうに思はれてなりません。慙う何んとも申せない氣品と美しさは矢張古代の大國であつたといふ自然に悠長な影がその面に現はれて又四邊の風情一體が非常によいと存じます。之はホンの私一個の趣味なので只今宅へ見えます三十人許りの方々にはお自由に其天分と趣味性とに依つて御自身の筆をお揮ひなさるやうにお教へ致しております。』

## 趣味から實用

## ミシン刺繡の長嶺松子女史

ミシン刺繡の中でも精巧な技術や美術的な頭腦を要する婦人の半襟を、月々三千本餘りも大問屋から依頼を受け、又一方には若い其道の娘さん達に教授してられる健闘婦人長嶺松子さんは故札幌農科大學教授長嶺林三郎氏の未亡人で御良人が一子浩さんを遺して逝かれました後の松子さんは全くの獨力で現在の特殊な技術と名聲とを揚げられたのでした。

「私はもと故菊地芳文先生の門に弟子入りし趣味から割出して繪畫を學んだのでした。が許婚であつた長嶺に嫁してからは、家事の餘暇にミシンを始めのやうになりましたが、思ひがけない夫の早逝にと／＼、現在では職業となつて了ひました。此のミシン刺繡の半襟に私が手をつけていろ／＼、研究を重ねやうとしてゐる時、シンガミシンの方々からも御勧めがあり又不圖下町の問屋から大きな注文を持ち込むやうになりましたが、もと／＼世間といふものを存じませんでした私の事、最初は男の職人などにいろ／＼胡魔化されたり、成程斯んな事もあるものか……といふやうな其處には云ひしれない苦勞も嘗めてどうか斯うにか今日迄やつ

て來ましたが、もと私の心持が營業といふよりも趣味の方から出たので只今參つて居ります四十人許りの方々、(婦人にして各修業を積んだ人々)にも總てお金を多く取るといふ方針よりは尙此上とも研究を重ねて、やがて一國の立派な美術品をも生み出すやうにといふ工合で私も共に努力してゐる譯で御座いますが、矢張りその成績のよい方は十七八から二十一歳までに多く、そして其境遇も卑しからぬ中に何かの刺戟を有つて、野心氣もなく氣が散らずにしてゐるといふ方が、最もその將來があるやうに思はれます。』

## 流離の境から

身を起せし名譽の産婆岩崎直子女史

畏くも今の皇太子殿下が御誕生遊ばされし明治三十四年、其の御取り上げの御用命を拜した名譽の産婆岩崎直子女史は名聲と共に其の技術も愈々進んで、多くの人々の信賴の焦點となら

れました。『岩崎さんは別に運動ケ間しい事もせず、實力に依つて期く譽高き恩命に浴された位の方ですのに拘はらず、極めて氣輕な方で何んな穢苦しい家へでもお頼みすれば直ぐに來て下さる』といふのが直子さんに對する一般の評判となつて居る位です。之れも御自身の職業を全く仁術と心得て御盡しなさるからでせう、此の直子女史の御家柄は由緒正しい立派なお家柄で女史がお話に依つても其一端が窺はれます。

『私が生立ちます頃、私の家は全く窮迫のどん底にありましたので、随分苦勞を嘗めました、もと父は越後の小藩の老職を勤めた者ですが維新當時の騷動で遂に入牢の身となり、家名も斷絶しました程故それに連れ添ふ母も共々非常な困難を重ね、私も何處だか知れもせぬ空家で産聲を揚げましたやうな譯で御座いました、それからの貧困な生立ちはお話し致せば長い事でございますが、十九歳の時に岩崎家に嫁して二子を挙げ、その後主人の友達に勧められて不圖大學の産婆養生所に出て見るやうになりましたが、間もなく主人を失ひましてつい慙う

した職業になつて了りましたのです、職業に就いての苦心……それはたゞ誰方にでも自分が能ざる丈けの力と真情とを以てお取り上げ申すだけの事で御座います、が私は今日まで幸ひにいろ／＼力添えをして下される母がございましたので彼の天恩に浴せし以來常に『此の謝恩のためにも、お前のお預かり申す凡てのお産婦方に對し貧富の別なく大切に勤めなければならぬ』と申して教へて下されます。之れが私の今日ある所以でせう。』

### 糸針の道に盡す

#### 和洋裁縫女學校堀越千代子女史

九段坂上の和洋裁縫女學校は明治三十年春の創立で、今年はもう二十五年といふ永い年月を経過し一年一年隆盛に經營されてゐます、校長の堀越千代子女史は世に知らるゝ裁縫界の權威で故矢田部順子女史などとは夙に研究を共にし、苦樂をも一つにした御仲でゐられます。千代子

女史が平常の身嗜みは、何時も着崩れの見えぬ御召物の重着や、其のしとやかな御動作の中にも窺はれ、流石に糸針の道を以て立たれるお方とこそは一目して頷かれます。

『近頃の若い娘さん達は裁縫などは左まで骨を折らなくてもよいとの御考へが、大抵の處まで御やりになると直ぐやめてお了ひなさる様です。それは時勢の違ひもありまじやうが、私共が一心に習え覚ええました頃は雲泥の相違があります、私共の時代は毎夜三時過ぎでなくては床に入らなかつた程で、随分骨を折りました、私は家庭を持つて子供が一人ございましたが、それが手離せますと、又再び専門的に稽古を積みました。即ち洋式では佛人に就て十年間、英人の許へ十年間、又和服の方では彼の先生は袴がお得手だ、お羽織が専門だ、といふ様に稽古を致しました、何事でも研究を積み積む程益々慾望が出て、愈上達してゆくのだらうと存じます、私が恚んなに熱心に裁縫に志しましたのも、元はたゞ好きであつた爲めで、別に學校を創立するといふ様な氣持もありませんでした、併し皆さんのお勧めで恚うし

て學校を經營するやうになつたのですから此校は普通の各科の他に自活の道に窮する人が半年も此處で修業して後直ちに二十圓三十圓位は得らるゝやうな道を與へる爲め毎月の入學を随意に許して、殆んど個人教授をも施してゐる譯なのです』と修業時代を偲びつゝ物語られました。

## 澁い美音で鍛へた

歌澤の師匠の寅右衛門さん

神田金澤町四番地歌澤は寅派の家元、寅右衛門さんのお住居をお訪ねする磨き抜いた表格子に温かい陽光が映つて、バツト吹き込む街の塵を避けながら、急いでお玄関の中に這入ると、先づ取付きの間から、暢然とした品のよい絃の音と、うらゝかな細いこまかい唄の一節が洩れて、何んとも云はれぬ床しさに、戸外の春風吹き荒むのさへ忘れ果て、此家ばかりは全くの別

天地といつた感じがするのです。日本特殊の音曲が此歌澤といふものに依つて代表されるとしたら、其芝派よりも一層澁いと稱されてゐる此家元の寅右衛門さんは、其容姿からしても亦まことに意氣で上品な優しいお師匠さんといふ感じを人に與へられてゐます。

『イエ、もうそんなにお賞めを戴く程の私では……たゞ母が幼い時から一心に仕込んで下されましたので、其おかけで如何やら慙うして續けてをりますけれど夫が亡くなりました其前後暫時止めてもをりましたし駄目でございますよ、さア難しいと申したらまア一通り何んでもやつたといふ方達が一番最後に此派に入つて被入るのでもわかりますよ。唄は極く短いのですが……まア節廻しの巧い拙いでぐつと違つて了ひますねそれには矢張りお聲の美しい方はお徳ですが、それも皆さんの努力に依つてでございます』

と、語らるゝ寅右衛門さんの背後には文金の高島田に品のよい紫がかつた色のお羽織で緋桃のやうに美しい秘藏娘のおひでさん、もう此頃はお母さんの代稽古もされる程に上達されて、寅

派の家元はいよく其の繁榮の末廣を示してゐるのでした。

## 不知不識に十五年

タイピストの權威松永あさ子女史

工學士故松永新之助氏の末亡人あさ子女史は、現在赤坂葵町のミスター、ケネデー主幹の國際通信社事務所で、タイピストとして一人靜かに其の職に従事されてゐます、婦人の能力が總て男兒に劣つてゐると云はれたは、昔時から女は何事もせず、唯男兒の命にこれ従うてのみ居たからの斷定で婦人の能力も亦試みらるれば、適當に作用かせば決して男子に劣らぬといふ實例は幾らもありませう、此處に揚げし松永あさ子女史の如きも其實例の一つで現に其の明晰な頭腦と、纖弱な五指の働きとに依つて、美事に男子を凌ぐ立派な能力を示してゐられます。「私などは自分で慫うして働いてをりますことをお隠し致してゐた位なのですよ、たゞ良人が

八年前に逝くなりましたので、餘儀ない事情で職には就きましたけれど、もと／＼私は至つて姑息な人間で、婦人が外へ出て働くよりは成るべく家にゐて何事か致したいと存じましたので、まア慫うして終日一つ處にゐて自分出来る仕事なれば、どうか私にも出来ようと始めましてから丁度もう十三年ばかりになります、私は仕事に骨が折れるといふよりは、其以外男の方の仲に交つて働くといふ事の方が、即ち其等の御交際等の方が骨が折れるやうに思はれます。で、只今はケネデーさんと二人きりで事務所にをりますのでほんとにそれは氣樂でございます。えゝ？ 娘でございませうか、いえ、もう彼娘は今年私の母校である横濱のフェリス女學校を卒へましたので此れからはたゞ女らしく温順しやかな女にと、躰るつもりでありますの……」

と、あさ子女史は凡て日本古風の貞淑な賢母らしい感じの中にお談しなさるのでした。

## 髪を結ふ爲めに

生れて来た伊賀とらさん

京橋は宗十郎町のとある辻、水菓子屋の隣の小じんまりとした一構への格子戸を開けて訪ふとふうはりと床しい香油の香りが鼻をうつて、ズラリと並んだ鏡臺の前にはさる實業家の奥様や艶つほい美しい女達の座が並び背後には白い仕事着を着た梳手が十人餘りもせつくと丈なす黒髪を梳いてゐます。これは女髪結の名人として知らるゝ伊賀おとらさんの御宅です、おとらさんは一日に百人からの頭髪を美事に結び上げて、年中殆んど一日の休みもなしに、趣味本位に此の職に従事されてゐますが、如何にも一藝に達した名人らしい氣分に充ちた、快活な調子で今結び上げた意氣な丸髷に荒櫛を入れながら、

『左様ですね、私はまア他人さんの髪を結ふために此の世の中に生れて来たのじやないかと、

自分ながら思ふことがありますよ、その位斯うして千筋の丈なす黒髪を自由に思ふ通り弄つてみるのがほんとに楽しみなんです、これでも其日／＼の氣分で少しは違ひます、何んでも一時間に廿位、まるでオートバイの様にさつさつと結び上げて了つた方が、自分でも好く出来上つたと思ふことが多うございますよ。しかし斯んな時には愉快は愉快ですが矢張ほんとに疲れて了ひますよ、何しろ毎朝五時頃から朝飯までに華族さんや下町の大きなお邸からお迎ひの自働車を戴いてすうと一廻りして、それから夜分までは此通り自宅で結び續けるのですから折々はまアそつと抜け出して箱根や熱海などへ骨休めに出かけることもあるのです。幼い時の記憶を辿ると小學校をそつと休んで親に叱られても友人の髪や知人の髪を弄つてばかりゐました、どうも全くこれは有つて生れた私の職分なのでござんせうネ』

と、談す中にもおとらさんの手は少しも休まず丸髷に島田に束髪に鬘のやうな美しいのを結び上げてゆくのでした。

## 十五年一日の如くに

松坂屋の女店員山崎けい子さん

櫻花の名所は先づ上野廣小路の一角に巍然として聳え立つ紅煉瓦の建物は、誰も知らないとう  
松坂屋ですが、此店にもう十五年の長い日月をたゞ一日の缺勤もなく、現在百數十人餘りの  
女店員女給達の上に、仔々として其職務に盡してゐる山崎けい子さんは、昨年秋には同店から  
功勞褒賞をさへ授けられて、其一生を此店に送らうとさへしてゐられます。

『最初私は何が目的で獨立ち致さうといふ考へもございませんでしたけれど、不幸にも早く良  
人が逝くなり一兒を伴れ生家へ歸りました其時、丁度明治四十年此店が名古屋式の古風から  
脱して陳列といふ事を始めましたので、不圖お勧め下さる方があつて勤めるやうになりまし  
たのでした、そしてこれから獨りで働いて子供や親も養て行かねばならぬ身になつたのだと

思つた時、私は其の職務が何んであらうと決して／＼自らは廢めまい他へは轉ずまい、と覺  
悟を致したのですが何のお役にも立ちません私ながら、左様した精神を御店でも視て下さ  
つたのか、長い間まだ私は一度も此職務が厭だの、辛いのと覺えたことはございませんで  
只今は會計の方をお預かりしてをりますけれど、それは只正直に間違へないよう致せばよ  
ろしいので誠に樂で仕合せでございませす其に近頃は此女店員と申す職にもだん／＼高級な學  
識や思想のある方々がお這入りになつて來ますので、まア古い私共も骨の折れるやうな事は  
ございません』

と語る、けい子さんはそのなが／＼としたお容姿の中に如何にも不撓の精神が窺はれるのでし  
た。

## 音楽に依つて

人の世に傳道小倉末子女史

現今東都の閨秀樂壇はさながら花壇に百花咲き亂れて、おの／＼其の研を競へるかのやうにまた各自の技術に樂想に弛まぬ研究と特色とを發揮して聽衆の頭腦を開發させてゐますが、中にも強く、長く誠に女性の彈奏とは思はれぬ迄に壯大な余韻を示して居られますのは、彼の小倉末子女史でせう、女史は備はれる其氣品と輝ける美の所有者たると同時に御性格に於ても亦日本人の婦人には珍らしい程の理智性をより多く有つて居られます女史は徐に、

『私は神戸の生れで丁度義姉が獨逸婦人でありましたのでもう三つ位の折りからピアノの音を聞くと幼心にも何んとも云ぬ喜しさを覺えましたことなどが、今でもおほろ氣に記憶いたしてゐます、それで學校の方も神戸女學校の普通科からピアノ科を専修し後東京音樂學校に轉

じて、間もなく外國へ参りましたそして主に佛國のミヂユカル、アカデミーで遊びましたがその四ヶ年ばかりの間は、思ひ出しても懐しい事が澤山ございました、私は以前から基督教に信仰を有つてゐますので、恙うして趣味から音樂家の端に列なつて居ますが、此尊い淨いそして云ひ難い神の御教へを音樂といふものに依つて人の世に傳へたいのが私の念願なのでございますけれどまだ／＼左様した私の心の儘に響きを傳へてはくれませんのです。と、厚い信仰と際限なき藝術の偉大な力とに飽くまで没頭したいとのやうなすべてに獻身的な強い／＼印象を記者に残されました。

## 藝術の潜む力

に依つて勵精する竹本綾之助さん

「……女肌には白無垢や……」滑らかな美はしい聲が、細い白い其咽喉元から轉び出すと太い



強い撥の牙えに三絃の余音は長く、人の心の底にまで喰ひ入つて、微妙な感情の琴線に觸れ自然に冷たい涙がスーッと胸を絞つて来る。繊弱な女の聲、細い三筋の糸が強い人間の心を動かすのは其處に云ひ知れぬ藝術の力が潜んでゐるからとは誰人にも同感する所でありませう、今より二十餘年前後には、文字ある人も、なき人も男も女もたゞ其強い力に動かされていやが上にもその矯名を東都に馳せた竹本綾之助さん、現今の石井健太郎氏夫人、もうやがて婚儀も近づきさうな可愛らしい貞子さんの母人ともなられてゐます、昨日濱町のお住居にお訪ねしますと如何にも清楚な感じのするお家の中に、快よい印象を與ふる應對振りで

『矢張子供の折りから好きな道とて、今迄別に苦しんで修業したといふやうな覚えも御座いませんから、従つて苦心談といふものを有ちません、私はもと大阪に生れ、七八ツの頃、つい近所に義太夫の師匠がありましたところから聴き覚えに家で眞似を致して居りました。最初父は極く嚴格な人で、許して呉れませんでした、餘り私が好きなと人さんなどのお勧めで

彼綾瀬太夫の教へをうけて綾之助と命名し、最初から看板で出ましたので、ちと骨が折れました。上京したのはそれからすぐで、爾來長く東都で皆さんのお馴染となつて了ひました。人情の美や悲しさや嬉しさや云ふに云はれぬ念を演るのには、自分からして先づ其人物になつてかゝらねばならないのでこれは單に聲とか節とかばかりでできないものと存じます。

## 多數の子供の母として

## 櫻楓會託兒所の丸山千代子女史

現在我國の託兒養育事業中で最もその完備して成功してゐるものは、巢鴨宮仲に設けられてゐる日本女子大學附屬の櫻楓會の託兒所であります、此處の監理者丸山千代子女史は女子大學教育學部の出身で、七八年前より、此託兒所の事業に従事せられ、今では眞の母子も及ばぬ迄に、その温情と鞏固な精神とを以て、全く献身的に七十名餘りの託兒及それらの家族をも教導



『善い先生』といふ評判がいかにも高い。『お嘶伽の大家だなんていつたつて、宇佐美先生には及ばないや』と一人の坊ちゃんと言へば『先生のお談を聞いてると、私泣きたくなつたり笑いたくなつたりしてよ』と一人の嬢ちゃんが相槌を打ちます。けに宇佐美先生は心のすつきりとした優しい、然かも頭の極めて透明な方で、色白で額廣く、いかにも美しい清い表情をして、無邪氣な笑ひ顔をなさるので、小さな坊ちゃん嬢ちゃんには想はず知らず引き着けられて、『先生、先生』と八方から紅葉の様な小さい手を差出して、先生に握手されるのを唯一の喜びとも光榮とも想つてゐます、女學校の先生としても幼稚園の先生としても理想的な敬子さんは、安井哲子女史の愛弟子で、お茶の水在學當時は日曜毎に安井さんのお宅に行つて、磁石にでも引着けられたやうに、用事もないのに茫然して居られることもありましたが、安井女史を崇拜して居られたので、深く安井女史の感化を受け、やさしい裡にも凜とした犯し難い氣品を備へて居られます。今は女子學習院で野口幽香子女史に秘藏娘のやうに愛され、離れ難い美しい友情を以て共

に育英の業にいそしみて居られますが、或る時打ち揃うて上野に行かれ、傳品館に立ち寄つて野口先生がいろ／＼とお買物をされましたも宇佐美先生は何にもお買ひにならなかつたので、『あなたは身上持の善い方ですのネ、普通の婦人ならば、一人が買物をする、直ぐ自分も釣込まれて不要な物でも買ひ込むのに、あなたは少しもさういふ誘惑をお感じにならぬのは偉いものです、あなたの奥様振りを拜見したいものです』と、野口先生の面白い此批評の賞め言葉に『まア、私そんなに言つて戴く價値はありません』と宇佐美先生は謙遜して笑はれました。

## 津田女史を補佐して

## 女子英學塾の辻松子女史

柳 楓の若葉がサラ／＼と囁き合ふて、窓の外、高く晴れ渡つた蒼穹に、温い陽の光が能く見透かされ、向ふの芝山には、ポインター種の番犬が、白と焦茶の艶々しい毛の胴體を、長々

と見せて寝轉んでゐる、佐々木の原を一眼に瞰下すやうな高臺に、快い新築の一構へは、外國語學校教授辻太郎氏の御邸宅。といふよりは、此處は女子英學塾で現在校長代理の重任を背負つてゐられる辻松子先生のお住居と申した方が適當かも知れませぬ、辻先生は元小柴姓を名乗られて居ましたので、其の當時小柴武子女史と能く間違へられたことのある方です、松子先生は彼の藤岡博士夫人など、同期にて女子高師を出られ、直ぐ留學生として、先づ米國に赴かれ、同地に滞在約一年有半にして、更に英國に轉じ、オックスフォード大學の自由な聽講生となつて、二年間熱心に研究を積み、歸朝後母校高等師範に教鞭を執つてゐられましたが一昨年辻太郎氏と結婚されたのでした、松子先生が女史英學塾の津田校長を補佐して其の校長代理となられるとの話は、餘程以前からあつたのですが之れが公式に發表されたのはこの四月からです。

『……でも、まだ津田先生が校長でゐらつしやるので、私はほんの實際のお手傳ひ丈を致しますのです。それもまあ、最初、津田先生や新戸渡先生などから、いろいろお勧めもございました。した時私のやうな官立學校にばかり暮して、個人經營の學校の慣例や因習に不馴れなものに果して能く其の使命が果せるか如何か危ぶまれたのですが、何事にもたゞ自分の力の及ぶ丈のことを致せば、宜しからうと存じまして御受けしたやうな次第です。單科大學に致す、それはまあ行く行くの希望ではございますが、今急いで何も左様なことを致す必要もなからうかと存じます。何よりも實力が大切でございますから』

と、物靜かな態度で語られました。

## 隠れた聲樂天才

高等師範附屬の水田光子女史

先年上野に慈善音樂會の開かれた時、水田光子さんといふ方の獨奏がプログラムに出てゐるま

したが、聴衆の裡には其の名を知る人が極めて尠なく、どんな方でせうと好奇心を起しもしなかつたですが、其の名前主が樂壇に現はれて、その聲を聞くと同時に、滿堂の聴衆は全く其の朗々たる美音に酔はされてしまいました、聲の量といひ、美しい諧調な響といひ、まア何んといふ立派な婦人であらう。此の隠れたる聲樂家の名は集つた人々の口から口に傳はりました。水田さんは女高師理科の出身で、在校當時には其聲樂を以て生徒間にも教授間にも大に持て囃され、學藝會のある度に、壇上に引出だされてはその天賦の美音にやんやんと喝采を博されたものでしたが、運命は此の天生の聲樂家をして極めて地味な小學教育に従事せしめ、今は大塚の男子高師附屬の先生として少年少女の教育に盡して居られます。併し此の樂才が水田先生の小學教育に大なる裨愛を與へて居ることは事實で、先生、歌つて下さい。美しい聲を聽せて下さい』などいふ無邪氣なる懇願に、女史は微笑んで、少年少女の耳に御馳走をしてやられる事もあるそうです。女史はかゝる妙き樂才のみならず、お伽噺の作家として、中々の文才を示

され今では二三種の著述を公けにして多年の教育の經驗から得たる童話の作者として他人の企て及ばないやうな妙腕を示して居られます。女史はそればかりか手蹟極めて美しく、お茶の水在校當時には能く其の同窓に頼まれて、百人一首などを男も及ばぬ達筆を以て木のカードなどに書かれたものでした、『之は水田さんに書いて貰つたのです』と言つて、今でも木製の歌留多を秘藏して居る同窓の友もあるさうです。

### 希望に輝く双の瞳

#### 女子學院の三島光子女史

櫻若葉に木蓮の淨らかな香が低い鐵柵の間から香つて、高い洋館の窓からは、ソナタの一節こゝろも清々するやうな音が洩れる、番町は女子學院の校門を毎朝松葉杖に縋つて登校される若い女の先生があります、其の歩みの不自由なのに似ず、何時も生々とした御面には美しい双

の瞳が輝いて何事かの希望と多くの抱負とを有つていらつしやるやうに見受けられます、此の若い先生こそ同校で評判の三島光子先生です、先生は今英文學教授の外に、同校の校友會雜誌の編輯や、其他文藝に關することや、校務の難事にまで携つて居られます、趣味の廣い、何事にも熱心な方であるせられます、光子先生は北海道に生れ、早くから出京されて同院に學び、後母校に教鞭を執られましたのですが、彼の武林無想庵氏の令妹であるだけですだけに、文才にも富まれ、公務の餘暇には翻譯や創作などにも従事され、心靜かに自からを慰めて居られます併し自己を吹聴する様の事は大の御嫌ひで餘り世間には發表されません。

『……ね、あのおしづさんは、(故素木)御足が不自由だといふので集りの折などは彼の方に好い席を譲つたり、又手を貸して上げたりしなければちよつと、デリケートな點を現はして直ぐ厭なお顔をされたやうですけれど、三島先生は、そんなことにも一寸もお構ひなくよく人達のお世話もなさいますことね』

と、校庭の木蔭で二三の生徒が語り合つてゐるのを聞いても、光子先生が如何にお優しく且つ非常に快活な御氣性で居られるかと窺はれ、校内での人望家であることも察せられませう。此の七月ミス・ホルセー及び三谷民子女史などと共に渡米されて彼地の大學で研究を積まれるさうですが、其の明晰な頭腦と熱心で而も趣味深き御性質と相俟つて、一層深遠な學理を究め、歸朝後は目覺ましき御働きを見せられることとせう。

### 公務と家政と短歌

#### 第一高等女學校の太田光子先生

太田光子先生は現今、府立第一高等女學校で、國語と家事との教授を擔任されてゐます。ただ此校では、左様古顔でもなく一體のやり方が派手な、交際上手な方といふでもありませんが其飾氣のない、自然のままの御性情から流露する御行動は、克く人のこゝろを惹く強い力とな

つて、校内では、温厚で堅實な、良い先生として人望を脊負つてゐられます。此の先生が多く  
の自然美點を有たれるには、其處に又た一つの道理が有るのです、先生は別に四賀光子といふ  
お名前がありますが、之は彼短歌の月刊雑誌『潮音』へ毎號お歌を載せられる時の假の名で御良  
人太田水穂氏の編輯さるゝ此の『潮音』にも亦た絶えず其天分の豊かな詩想を歌はれるを見ても、  
先生の御性情が窺はれます。光子先生は信州諏訪在の四賀村、有賀家の娘として生れ嚴格にし  
て温情に富める御兩親の膝下に人となられ、自然の恩恵に富める信濃の高原に、其の天稟の文  
藻を養ひ、聽て幽雅温良の淨い處女の身を御茶の水の女子高等師範に寄せて、志す文科を専攻  
さる當時、水穂氏との堅い御縁が、其御兩親達の間に結ばれたのでした、爾來お二人の仲は愈  
睦まじくお互ひに其大事な職務に精勵されつゝ今日に至つたのです。斯うした風雅な御夫婦は  
務めの餘暇に楽しい旅行に詩裏をふくらませ、時には久方振りて故國へ歸つて郷土の懐しさを  
味つたり、それは〳〵御羨ましい御生活です。

見ざりしも十年となりぬ古里のうするの山を今こゆるなり

吹きくるは山の朝風久しくもわが戀待ちし山の朝風

と碓氷の山を越えて、古い親しい友達や戀しい親達と舊情を交はされる光子先生の御心榮えは  
此の短歌の中にもよく現はれてゐるではありませんか、慙うして光子さんは、外の公務と家の  
修めと、そして現今御良人の御兄弟のお子さまを引取つて世話さるゝなど家庭の人としても亦  
見遁し難い多くの美點を有たれてゐるのです。

### 英國からの電報で

晴々した三輪田の杉森花子女史

三輪田高女の杉森花子女史は可愛ゆい先生として生徒間に評判が善い。技藝を教へるにも、  
繪畫を教へるにもやさしい綺麗な聲を出して、いかにも親しみのある先生として、生徒に懐し

い情を寄せてゐる、『先生は獨身かしら、奥様かしら』二三の生徒が或時かう囁き合つたが、結局水掛論になつたので、其の中の一人、無邪氣なのが、『先生にはお子さまがありました』と小さな聲でお尋ねすると、杉森先生は一寸顔を赤くして『えい、一人ありますの、女の兒でしてネこの四月からお茶の水の附屬小學校に通はせることにしました』と仰つしやつた『ねい、だから私初めから奥様だと言つたでせう』と奥様説の生徒は勝ち誇つた。でも、先生の御主人が何をしてゐる人か生徒の中に餘り知る者はありませんでしたが、三月の試験前に『杉森先生のお顔は此頃晴々して来たようね』とさも大發見でもしたやうに言ひ出した一人の生徒がありました。した『どうなすつたのでせう』『キットいゝ事があつたのよ』と生徒達は言ひ合ひました。やがて先生の兩國のお家へ近頃伺つたことがある一人の生徒が次の様な報告をしました『杉森先生の御主人が英國からお歸りになるといふ電報が来たのですと御主人は杉森南山といつてね早稲田を出て、文部省の留學生になられて、それは偉い哲學者なんですつて、此間『道德帝國の原

理』といふ英文の哲學書を倫敦大學から御出版になつて英國で大變評判なんですつて、もう六年も英國におるでになつたのですから、先生が嬉しがつてゐられるのも當前ですわね』まあそんなに偉い哲學者なの』今度御歸りになつたら文學博士の候補者なんですつて』まあ、いゝわね』生徒達がこんな風評をしてゐる廊下の前を杉森先生が折善く通られたので一人の生徒が、『先生、お目出度う』と言ふと『なに、なんですか』と杉森先生が不審さうな顔をされたので、『英國からお歸りになりますさうで』と、他の生徒が説明すると『まあいやだ』と杉森先生は急ぎ足で教員室へ入られました。

### 紫の研究で名高い

女子高等師範の黒田ちか子女史

我國最初の理學士と云へばあゝ黒田ちか子さん、と人は直ぐ領くことでせう、又近くは紫色



の研究でよく其デリケートな女性の能力と懈らず倦まぬ努力の賜物とを示されて男子の化学者達を驚嘆せしめられました。かくて黒田女史の名は広く稱揚されて來ました。長い間女は學問の要らぬ者、婦人の能力は到底男子に匹敵し難いものとのみたと抑制されて來た我國の婦人界に慙うした人が生れて出たかと思へば何等の恩怨のない者までほんとに喜ばしいと思ひます。此黒田先生は元佐賀市は名も床しい松原町の去る素封家に生れ、同市の師範を卒業されてから直ちに女子高師の理科に入學されて、明治三十九年度の卒業でゐられます。それから一年ばかり福井の師範に奉職し、次いで再び母校の研究科に入り、助教になられました。大正二年東北大學の化學科に入られました。此時の同窓が牧田らく子女史と、丹下梅子女史とで、其頃から黒田女史は春夏の休みには屹度母校に歸られて、同校理科の人々にさまざまの講演なども同校の依頼に應じて試みられてゐたのでしたが、此先生の熱心な懇切な教授振りには男の先生方よりも強く多く生徒さん達に親しみと共鳴とを與へるのでした。故に昨年同校の教授となられて

からの名聲も亦非常によく、

「學位や、名譽、左様したものは今日迄一切感えたことも御座いませぬ。たゞ幼い時から文學が好き、研究が好き、といふ所から、慙うして自分の志す道へ進んで來たと申す迄のことなのでございます。併しこれも、多くはいろ／＼お世話になりました先生方のおかげ様と常に感謝致して居ります。」

と、黒田先生は飽く迄謙遜な學者らしい態度で在られます。

### 昔の天使今の慈母

日本女子大學校の平野はま子女史

日本女子大學校の平野先生といへば幾多在學生徒の生徒監として、又長い間の寮監長として、彼の井上秀子先生と共に誰れ知らぬ者もない名望の高い先生で、そして目白に女子大學を

創立された明治三十四年の春から今日に至るまで引續き教鞭をお執りになる随分古い、云はゞ元勳とも稱せらるゝ方であるらしいやいませ、此の二十年近い永い間の御精勵でか、兎に角御變りになつたと云ふ感じは誰れにも起りませう。先生は名古屋のお生れで、早くから横濱に出てフエリス女學校に學ばれたのですが、その天稟の優しいお性質と、明晰な頭腦とは何時も校内の衆目を惹き、模範生として、又フエリスの天使として同窓達の尊敬の的になつて居られたとのことですが、其の幽雅にして温情に富める才媛の先生が女子大學へ入られた時分には先生は毎朝金山の邊りから櫻楓の茂り合ふ青葉の下を白いシヨールを被り、聖書を手にして尊い神の教示に共鳴し、自然の美に感銘してはそゞろに讚美歌を謡うて飽く迄フエリスの天使らしい御姿を見せられたのでした、併しまた一面には人をそらさぬ如才なき所謂女の型をも程よく備へられて同僚や多くの生徒達に自然善い評判が傳へられ、蘊蓄ある學術と共に平野先生てふ名は愈々高められました、明治四十一年には現三井男爵夫人の捨子さんが同校卒業後父君と共に世界

漫遊さるるに付き添ふて、歐米を巡遊し、歸朝後は新文明の思潮と其性情とを發揮して、一層若き女性達が精神的指導の任に努力され益々畏敬の焦點となられました。が常によく故成瀬先生の精神を體得して遂に吾國婦人最高學府の生徒監の重任を負はれたのです。

「近頃の婦人は非常に進歩して居られますから、入學なさる皆さん達の方が解つてゐる位で、私などは御教へするにも左まで骨が折れません」  
と、言葉類の眇い謙遜の御態度にも、おのづと敬意を拂はずには居られません。

### 無宗教の老嬢の心理

老嬢といふものは、讀んでその字の如く年老いたお嬢さんといふのでせうが、その老いた年といふのは、略、定まつてゐても、この老嬢といふ言葉を被せるのには、まア何歳位の年輩か

ら申たら宜しいのか、ちよつと見當がつきかねますね。

西洋邊りでは、随分お婆さんになるまで獨身でゐて、急に結婚する婦人も多いようですが、これは屹度、それまで自分の理想の夫といふものが見當らないでゐて、やうく見附かつたといふので、もうその年齢なんぞは考へてゐるずに結婚して了ふのでせうね。併し日本では是迄、女も男も一體に婚期が早かつたから、まア女が三十といふ年齢に到達すれば、人は、殊に男などは、直ぐ、あの老嬢が……といふことにして了ふそうですね。何も老嬢が……と云はれたからとて、厭がることもないのですけれど、矢張り現在のところ、三十位の女は、左様いふ言葉を大邊に厭がるさうです。何故でせう？ 老嬢には何か面白くない點があるのでせうか……。

さア、無いこともありませんね。老嬢といはれて厭がるのも、それはその女達が眞實に、堅い獨身主義か何んかで、左様してゐるからなのではなくて、遂、うかくと年を取つて了つたといふ形なのが多いからなのです。まア日本のような國柄では、娘が年頃になれば大抵、親達

が心配して適當な配遇者を定めてやります。でなければ自分同志で正しく定めて結婚するでせう。それを、別に獨身主義でもなかつた女が、何時迄も嫁入らずに來た。といふのは、その家が嫁入らず丈の、そんな餘裕がなくて、娘の婚期を失つて了つたのか、又は娘自身に何か缺點があつて貰ひ人が無かつたのか、又は何事か込み入つた事情が胚胎してゐた爲か、何れにしても餘り幸福な女であつたとは云はれない譯でせう。左様して段々年が経つて、世間を多く見る間に御當人の理想ばかり高くなつて、反對に、はげ口の方は、低く下落してゆく譯なのです。から、いよ／＼老嬢になつて了ふばかりです。

恚う云ふと、老嬢は屹度、『否、和は嫁になんか行かう、と思へば今迄幾何でもあつた。こんな家からも、あんな男子からも望まれた。けれど、何れも自分の理想でなかつたから……獨身の方がどの位、いゝか知れない……』なんて、もう定り文句なんです。が、それでゐて、不圖友だちの誰かど、お嫁にでも行くなんて聞くと、その心奥は恐ろしく寂しい、腹立しい、

何とも云はれないようなこゝろ持ちが、ヒシ／＼と胸を絞つて、人知れず、センチメンタルな感情に陥つて了ふのです。左様して、他人の嫁入る時は、嘲笑つて置きながら、『オヤ、あんな男のどこへ……』と思ふようなところへ、何時の間にか、コソ／＼と嫁に入つたりする例は、よくあるぢやありませんか。……それでも何でもいゝ。まア嫁に行く方がね。なか／＼獨身主義なんてことは、難かしいんですよ。但し豪くない女は、ですよ。

そこで、老嬢といふものは、何といつても、癖みが強い、妬み根性、捻くれ根性などは、老嬢の特有性といつてもいゝ位です。それ丈神経が尖つてゐる。といふよりは、もう何となく、焦燥して傷み易くなつてゐるのです。ですから、他人が右といへば、直ぐ左と出たがるし、他人が嬉しがれば、直ぐ何とかケチを附けたがる……。私が、私が……といつた氣持ちも絶へずしてゐるのに、他人に何でも先を越されてはならない。といつたヤキモキした氣分も混つてゐるのです。又、嫁に貰はれなかつた代りに、自分で何事でも能きるといふことを、人々に思は

せよう／＼としてゐるところもありますね。恚ういふもの知り顔をするとところから、男は餘計貰はなくなるのです。

ね、私が男だつて、矢張りそんなのは厭ですわ。初めて結婚するのには、矢張り若くて綺麗で、やさしいのを望むのは當然ですもの……例へ二度目で、子どもだちが澤山あるにしたところで、そんな捻くれ根性の、優しく温味のないのは、幼い者の爲にだつて、決してよい感化は與へませんからね、教育？ えゝ、その教育といふのが、ちよつと問題ですよ。何も、人間は文字の學問ばかりが教育ある云々……とは申されませんがね。教育は、もう單に學校内の教授如何に依るものぢやないのです。矢張り母親が最も肝心で最初、母親の躰方さへ行届いてゐれば、仕舞には人は自身に精神修養もするでせうし、自分何事にでも研究心を有つようにもなるでせうから、何も學校教育ばかり高い、そんな老嬢を貰はなくても、女らしい女は幾何もあるといふことになつて來るのです。

ですが、この老嬢も、何事かの動機からか、又は、全く西洋などの良家庭に生れて、尊い尼寺の生活を生涯爲し遂げる。といふような、深い堅い信仰に基因して。ミスの生活を送つてゐる婦人は、ほんとうにいゝと思ひますよ。左様な婦人の生活こそは人妻となつて、僻へ幸福に暮してゐる婦人だちよりも亦、一層いゝと思ひますね。まア私などの知り合ひの中にも、そんな婦人はちよいゝありますけれど、全くまだ、他人に犯されてゐない、愛らしげな尊さ、淨らかな氣品さが、その身全體を支配してゐるようで、そんな婦人の前へ出ると、一旦人妻になつた者は、何となし氣の引けるような、こゝろ持ちさへ爲れるのです。

元々、女といふものは、人類を繁殖し、人類をよく保護するのが、天職と定められてあるのでせう。けれど中に、慥うした美はしい獨身生活を通す婦人は、よくその信念に依つて、女の使命、とちふよりも、自分自身の使命を了解して、それに限りなき満足と幸福とを感受してゐるのであると思ひます。ですから、どうか、前に説きましたような所謂仕末に困る、賣れ殘

りの老嬢だちは、その悪い心がけを改めて、早くお嫁に行くか、又は、修養を積んで後者のよ  
うな獨身生活に入る信念を固めるか、何れかに依ることは、第一その御常人だちのお爲でもあ  
り、又世間に多い心配家の氣を休ませる爲の、まア公德にもなるうといふものです。

## 趣味の家庭

### お寂しい御邸趣味の御家庭

龜井伯爵夫人久子の方

霜月下旬の一日、記者は初冬の陽光を浴びて、小石川丸山町の龜井伯爵邸の表門にさしかゝ  
りますと、折から静かな快晴の空に高く正午砲が響き渡りました。ハテ、心なしの訪問時刻よ  
とは思ひながら、お玄關のベルを押しますと、靜かに現れたお取次ぎは、やがて、美しい廣や

かな、應接間に記者を導かれました。此邸の御主人、茲常伯は東宮侍從兼式部官、夏冬は多く沼津、葉山などの御用邸に東宮殿下の御伴を遊ばして、お屋敷には普代の家令や家扶と奥様と三歳のお子様とのみで、『おさみしうございます……』とは奥様が御畫食の間を、わざと御相手にと出された家令のお談、廣やかな應接間には、豫て伯御夫妻が御趣味の深き西洋畫歐洲の名畫、彫刻などが上品に飾られて、片隅には、夫人が御堪能のピアノに、やゝおそ咲きながら懸崖づくりの菊花も美事に垂れ下つてゐます。やがて『どうも大變お待たせ致しまして……』と清かな御聲がして、久子夫人は出て來られました。一毛亂れぬ黒々とした束髪に、袷の重ね羽二重のお羽織、凡て、おとなしやかなる御つくりは、その自ら備はる氣品と共に、華やかで又奥床しい感じがされました。『慙うして、伯爵が不在勝でございますので、私も餘り外へは出ません方で、何かと世間のお話しにも疎うございます。たゞふゝ兒供達の教育と、申しましたも何も行き届きませんが家庭教師にばかりにも、左様々々責任は負はされませんので、い

ろ、公共の會(愛國婦人會)などにも副會長やら何やらと仰有つて下さいまして、内外に左様した任務は、もしお引うけいたした後、それを完うせられませんか、何れも御斷り申してをります。ピアノでございますか否えホノの兒供に温習つてやります位です、長男の茲建は又繪畫英語等を好みますので、學習院の歸途、四谷の山田嘉吉師のお宅まで通はせてをります……』と、誠に夫人は上杉茂憲伯の五女に在して、明治三十九年學習院女子部の優等卒業生で、當時才色兼備のおきこえも高きお方でございました。

## 繪畫に寫眞に盆栽

廣汎な知識の小笠原伯夫人

小笠原伯爵御夫妻といへば、御當主長幹伯が例の藝術家肌に加ふるに、貞子夫人が諸種の公共事に御活躍の他、御良人に似て趣味の多方面にゐらせらるゝ處から、折々雑誌や新聞を賑は

す材料とならるゝので、其の御家庭は嘸かし華やかに、御子息も家庭教師や御女中任せと思料する向きもありませうが、併し事實は全く反對で、一般華胄社會には珍らしく緊張した健實な御家庭で、あの奥様の如何に其家政や教育方面に意を注いでゐられるかと窺はれる位です。伯爵の御令妹で現在は尙公爵夫人の百子様時代から御當家には永年奉仕する雨森家庭教師が引續き長女の明子様を初め御學齡時までの御子様方の御世話なされるゝ外には、奥様が凡べて婦人の秘書や、お女中達を御指圖遊ばして、八人のお子様方の御躰けから、御家政の總てを攝つてゐられるが上にお子様方の御教育方針の如きも極めて平民的で、平常は何れもお揃ひの綿服で、御通學には決して馬車や俵は御用ひにならず、自治の風を養ふといふ西洋式、華族のお姫様とは思はれぬ程御快潤で、おやさしくて、學課の成績も常に優等を續けてゐられるとのこと、そして此御夫妻のことがよく世間に紹介せらるゝ割にお子様方のことが尠しも世に紹介されぬのは、「新聞に誰様のことが賞めて出でいらしたとか、誰様のお寫眞が出てゐるとか申しまして

幼い折から何となく虚榮心を唆るやうにも存じますので、子どもばかりは何時何許しを願つておりますの……』とは貞子夫人のお洩らし遊ばした御言葉です。そして敬服するのは他人の職業や心理状態をよく了解遊ばして、伯爵共々下情に通ぜらるゝこと驚くばかりです、奥様の御趣味は何と申しても繪畫にて、彼の満谷畫伯に就かれて、御研究は尋常一様ではありません又盆栽は津輕伯未亡人と共に斯界の訴判で、御寫眞は伯の御仕込みにや白魚のやうなお手を眞黒にしての御熱心……その他音樂に御旅行に廣い知識の上に養はれた多趣味の御家庭は欣羨に堪へぬ次第です。

## 篆刻に音樂に乗馬

旅行趣味に富む江木博士の夫人

薄綠色のレースのカーテンから、磨き抜いた玻璃窓を透かして、お庭の植込が初夏らしい氣

分を漂はせてるます森として物静かな應接間に暫時お待ちしてると御廊下からバタ／＼と登音がして『行つてお出で遊ばせ』と柔さしいお聲に、スーツと快い轍の音がして、今御主人の御出かけらしい御様子、やがて其室の扉が開いて

『どうも失禮いたしました……』若々しいお聲に適はしいお容姿。紫色のお被布ふつくりと結び上げられた黒髪は、艶々しく、白い美はしい面を一層映えさせてるます此の美しの奥様が、社交界に名高い、江木冷灰博士の夫人榮子様、又のお名を欣々女史など申上げたお方か。と、何時もお變りのないそのお若さに先づ一驚させられました。この夫人の御趣味が何であるか、それは伺ふまでもなく、篆刻といふ、婦人には最も珍らしい又最も難かしいものにあるとは人の知悉する處ですが、夫人は謙遜遊ばし、

『いい、もう此の頃は、篆刻の御話も古くなりましてお訊き下さいますと、ほんとに困つて了ひますのですもの、もう此の篆刻は十年餘りも手がけてるるので……最初は矢張り面白半分

から始めてみましたのですが、趣味に倦うまで凝つて了ひますと何處迄研究したら盡るものやら果もない様に思つて何だか悲しくなつて了ひますの、まア此後の十年を見て被入つて下さいまし趣味なくて、もう私一生の事業の一つとして何か斯道に有益なものを残して置一度とまで思ひ込んでしまひましたのですから、今はまだ申上げる時機でありませぬ。外國からも私を彫刻家と間違へてお訪ね下さる方もありますので、一々説明してお目につけたりするのですが、只今までに最も敬服した御觀察をなさいましたのは、彼の露國のチエレミツシノフ夫人で、一度私の像も刻みたいからなど申されましたのですが、私自身が何の眞實もありません考へ故、御辭退を致しました様な譯で』との御話、夫人の御趣味は此外にも多く、音楽では殊にお琴を好まれ、旅行に乘馬に詩歌繪畫に、殆ど盡ない位です。



## 平和な文士の家

中村春雨氏夫人こう子様の趣味

『まア、厭でございますよ、それこそ眞平でございますよ。』と、にややかに仰有るおやさし気な奥様の傍から

『でも有るのだらう？ 有るのならお貸したらいゝぢやないか……』と穏順なといふよりはムツツリとした調子の御口添へ、つい客も主人も共に笑はずにはゐられないやうな、自然に和氣と温味の溢れ切つた趣味の御家庭は、文壇に知られた春雨中村吉藏氏の御宅です。奥様は亦女子高等師範の先生で、教育界で直ぐこう子様と申上げたら肯つかれる方でございます、こう子夫人は彼北村初子女史などと御一緒の東京音楽學校の御出身で、以來女子高師に教鞭を執つてゐられるのです。

『鳴物は、それは好きでございますよ、けれども私はどうも引込み思案の方で餘り他處で、皆様の前で演奏するなどといふこともなく、たゞ慙うして呆然と月日が経つて了ひましたの、學校の方も以前からみますと、随分御巧手な方が殖えて参りましたやうです。音樂の他に、この頃尠しお活花を初めました、池の坊でございますが、なアにこれもお若い方のやうに一生懸命に致すのではなくて、家の中の仕事と、學校との餘暇にするのですから、どうせ碌なことは能きません、私はまア活花とか、點茶とかいつたものが好きなのです、けれど扱是と申して何も纏つては知りませんの……』と、つぐら飾らずの中に御謙遜深いお談振りは、その御主人吉藏様が寡言黙考がちな態度の中に自然と温かく他人を惹きつけられる御性格なのと相俟つて教養も深く、御趣味も高い奥様とこそ奥床しく偲ばれるのです。慙うした御家には何時もこのお二人も取り圍む文藝趣味に富んだ、お若い方々が宿られたり、お遊びに見えたりしてお賑やかに且趣き深き喜びの色が漂つてゐるのです。

## 和洋音楽や印刷や園藝

## 養鶏杯に没頭の遠藤夏子夫人

この程『社會と國體研究』といふ有名な著述を公にして江湖の喝采を博し讀書人を敬慕せしめてられる文學博士遠藤隆吉氏の夫人なつ子さんは故伊澤修二氏の令嬢でお父様が有名な教育家、又母君の千勢子未亡人が殊の外音楽好きといふ處からなつ子夫人の御趣味も亦和洋音楽にあることは元よりですけれど、御良人遠藤博士が、あの香氣相な三味線や齒の浮くやうな鳴物などは、餘りお好きにならぬので、夫人は遠藤家へ嫁がれてから、もう二十年間もトンと糸竹の道には親しまれぬとのこと、も貞淑な一面をよく示されてゐられます。他に園藝、養鶏、殊に婦人にだけはお珍らしい印刷業に興味を有たれて、御良人が御著書は元より、御昵近の諸博士が著書などを邸内の工場から此趣味夫人の御指揮の下にどしどしと印刷され出版さ

れるのです、夫人の趣味は單に手慰み半分の道樂ではなく。有益で且つ非常に活動的です。『私が印刷業を営むなんて、大層豪さうにきこえますね。ホ、ッ、何、譯なく直ぐ出来る面白仕事でございませよ。夫が何か著書を出すにしても、一々印刷業と交渉してゐるのは面倒でもあり、不経済でもあつて、多くの大々に讀んで戴き度いと思ふものでもつい左様は參らなくなりませんが、自宅に工場のあることは一寸都合が宜しうございませよ、その代り自宅ではその工場設置のおかげで、飛んだ散財もして了ひましたのですよ』と夫人はなか／＼經濟觀念にも富まれてゐられるのです。之れからの、婦人はたゞ夫の足手纏ひになつてゐる丈けでも困りますから總領の光子などは、聖心女學院のやうな語學の方に特色あつて、纏て萬一の場合に役立つ、そして堅苦しい宗教に束縛されぬ平民的で而も高級な程度の學校を選んで入れましたのですが、音楽繪畫なども好きですから私が手解きをした上に、師匠につけましたのです。子供が習ふやうになると遠藤も叱言を云はずお蔭で三味線やお琴も二十年振りて明みへ出されたと

大笑ひをしてゐるのです。

### 夫は博士となりて奥様の喜び

岡田和子夫人

市ヶ谷見附から二三丁麴町三番地の通りに入つて先づ眼につく、白練瓦塀の嚴めしい御邸そのお玄關迄敷き詰めた白い玉川砂利の上を行くと、高い洋館の窓から洩るゝピアノの音、曲は浮々とする軽やかなるに、和するは嬉々とした幼き聲音、やがて海上の、格天井も快い應接間に待つ間程なく、出て来られましたは、岡田和一郎博士の愛嬢で此度新らたに、醫學博士の稱號を贏ち得られた清三郎氏の夫人和子様でございました。何時もながら生々とした豐頬涼やかな双眸、凡べてその若々しくて美しいお容姿は、そのお二人のお愛子の御母様だとは、思はれぬ位でした。『おめでたうございます』と、云へば『ハイ、有難うございます、でも、たゞ

コツ／＼と順序通りに進んで参りました丈で……』と御謙遜がちな御談振りで『只今は、主人も稻田さんの内科や其他忙しうございます、私も此四月に武雄(長男)が生まれましてから、何かと家の中に慌しい日を續けてをりますけれど、一昨年父に伴れられて、米國に暮しました間はほんとに愉快でございました。主人は最初市俄古に私共を迎へてくれました、それから父と諸處を見て廻りました。丁度その年の十月から翌年の春三月頃まで紐育に親子三人で小さな家を借りて、共同生活を致しましたが、ホテルの生活にも飽きてゐた頃なのでほんとに自由で簡易であんな生活が早く日本でも出来るやうになると善いと存じますよ。又紐育のオペラも随分盛んで、殊に歐洲戦争のため、名優は何れも紐育へ参り、観客も皆高級な人達で私は音楽が一番好きでございますので、よく参りましたが、主人ですか、ハイ彼地で少し習つたとか私と共にピアノも少し致しますけれど、只今は極く暇な時、又子供を悦ばせるためなどにしか致しませんの……』と夫人は、かの古河男夫人、近藤男夫人など、御同級の學習院女子部出身の才媛

てゐられます。

## 私といふもの

私、といふもの、自分といふものを、自分で、ちいつと考へてみると、ほんとうに／＼不思議で奇妙で、何だか氣まりが悪くつて、恥しくて、とう／＼穴へでも這入つて了ひたいような氣持ちがして了ふ。これは、私の少なまだ何にも解らない子どもの時分からの、妙な感想の一つで、思ひ詰めれで、詰めるほど不思議で／＼堪らなくなつて了ふ。

この明い、廣い世界の一部の、また一部の一部に、この私といふ醜い肉塊の者が、どうやら人並に呼吸をして生存してゐる。左様して或多少の人々は、この私を知つてゐる『しいちやん』とか『百瀬さん』とか云つて、毎日何事か交渉してゐる。ほんとうに、まア私は不思議で堪ら

ない。

けれど、この妙な不思議な感想に捕はれる時は、極く僅かな時間丈で、近頃はだん／＼僅かになつて了つた、忙しいからだ。多分恁んな感想を年中、または一生の中に一度も抱くことなしに送つて了ふ人もあるかもしれない。人はみんな、毎日／＼をたゞ忙しさ——何のための忙しさだか、食べる爲の、遊ぶための、功名に走る爲の、何事かを發明する爲の、又はたゞ明い光や、騒々しい音やなどに氣を取られて、徒らに墓場に急ぐ爲の——左様した落付かない心持ちの中にあつて、恁んな下らない、左様して子どもらしい、馬鹿らしい感想は、てんで湧いても來ないで暮して了ふ人が多いだらうと私は思つてゐる。

私は、私といふものを考へてみる時は、鏡に向つた時に左様考へられるのと、机に向つて、ちいつと落付いた時に、左様考へられるのと兩方で、何れにしても誰人も傍にゐない、いろいろな思索を掻き亂して了ふような、物音のしてゐない時に限るので、近頃、だん／＼そんな感